ｉｆ　－The letter for you -

ともみつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｉｆ　－Ｔｈｅ　ｌｅｔｔｅｒ　ｆｏｒ　ｙｏｕ　－

【Ｎコード】
Ｎ３６０５Ｅ

【作者名】
ともみつ

【あらすじ】
一％の才能と九十九％の努力。そんなものはない。あるのは、一％の才能と一％の努力、それに八％の運だ。それから、あいつが教えてくれた九十％で人はきっと、これから生きていかないといけないんだ。戻ることの出来ない、たった一度きりの道を。

一抄．手紙とあの日

世界は手に取るように小さくて、水溜り映る青空のように狭いものだとしか、知らなかった。

「あのね、私、人は一％の才能と一％の努力と八％の運だと思うの」

吐息の染まる景色がいつの間にかなくなっていた。少しずつ朝が早くなり始めた季節、春。まだ開くことのない桜のつぼみも、真っ赤に小さく輪をなす梅も、姿の見えないどこかの鶯の声も、新品の制服に胸を躍らせる色々な一年生も、季節の移ろいの中でいつも花開き、いつも枯れていく。その繰り返しは、いつになっても変わらない。

「残りの九十％は？」

振り返るといつも君がいた。それが当たり前で、ごく自然で、日常としてそこにあるものだと思っていた。

「それはね、選択、なんだよ」

空を見上げると、そこに一筋の飛行機雲が静かに飛んでいた。不思議な感覚だった。あんなに高い場所には鳥は飛べない。虫も飛べない。翼を持ったものは飛べないのに、翼もない人間が飛んでいる。悠に高くて、星の煌きに手を伸ばすように、そして届かない。

「選択？　なにそれ？」

「これからの長い、長い人生ってやつ」

「人生なぁ。どんなのを人生ってゆうんだろうなぁ」

「何だろうね？　私たちじゃ分からないよね」

知らないことに対して、あれほど素直だったことは、きっともうない。

「まっ、要は運ってことだろ」

そして、あれほど無垢でいられた時期も、あれほど人を、異性を、ただの友達だと純粋に信じてその先のことなんて考えなかったことも、これから死ぬまでは、二度とないはず。

「ん〜、そうかも」
「自分で言って曖昧だな？」
「うん。私もよく分からないもん」
「あっさり認めるなよ」
ずっと続いていくものだと、誰も何もどこも、あらゆるものがその延長線の上を、本当に小さな世界のまま、代わり映えしなくともありふれていても、それだけが世界の全てなんだと疑うことを知ることなんかどこにもなかった。
「ねぇ、たっくん」
「なに？」
ひとひらに舞う何かの花びら。今になってもあの頃舞っていた花びらが一体なんだったのか、思い出せない。でも確かにあの時は春の暖かさの中にあったんだ。俺と美玖の間にあった、何かの壁になっていたものが。
「あたしね……引っ越すの」
「え？」
振り返るといつも君がいた。それが当たり前で、ごく自然で、明日も続いていくものだと信じることもしなくて、疑うこともしなかった。そこにあったのは当然の無意識。吸い込んで吐き出す空気がなくなる事を考えたことなんかなかった。それと何一つ変わらなくて、そしてそれがどれほど大切だったのか、茫漠と流れて消えていく時の中で後悔になるんだ。
「引っ越すの。お父さんが転勤って言うのをするからって」
「え？　引っ越しって、どこに？」
「大阪」
聞いたことがあるだけで、どこあってどんなところかなんて知らなかった。
「大阪？　あぁ、大阪かぁ。都会なんだよな？　へぇ良いなぁ、俺も行ってみたいなぁ。大阪城だろ？　へんてこな太鼓叩いてる人形とかあるんだぜ？　見たことないけどテレビで出てた。てんかのだ

いどころとか言うんだってさ」
　その程度の認識しかないことが、あんなにも恥ずかしくて情けなかったなんて考えたことなんかない。小学生だったから、大阪なんてすぐに行けるんだろうと、浅はかな思いしかなかった。
「やだよ。あたし、行きたくないもん」
　美玖は嫌がっていた。俺には驚きこそあったけど、そんなに遠いところだとか認識はなかった。飛行機の乗ればどこにだって行ける。だから哀しいって気持ちが分からなかった。
「はぁ？　何で？　決まったんだろ？　遊べなくなるのはつまんないけどさ、しょーがねぇじゃん」
「たっくんに会えなくなるんだよ？　みんなで遊べなくなるんだよ？　あたしやだよぉ」
　それなのに、美玖はずっとそうやって嫌がっていた。俺には大阪に行けばたこ焼きとかお好み焼きとか美味しいものが沢山あるんだってテレビで言っていたから、食べに行けるんじゃないのかとか下らないことしか頭になかったのに。男の精神は女の精神の何分の一の早さで成長しているのか、今になってもよく分からない。
「心配すんなって。手紙とか書いてやるからさ」
　それでも俺はぎりぎりで気づけたのだろうか。今にも泣きそうな美玖の顔に焦りを感じて、思ってもいなかったことを口にした覚えがある。
「ほんとに？」
「何でも書いてやるって。何ならクラス全員に書かせてやるぜ？」
「ううん、たっくんが書いてくれるなら、それで良い。それが良いな」
「おう、まかせとけっ！　ばんばん書いてやる。あ、でもどこに出すんだ？」
　その笑顔だけは、曖昧に消えゆく、消さなければ潰えていく記憶の中に今でも残ってる。あの時何を感じたのかなんて覚えてない。ただ覚えてるのは、それが美玖の笑顔を見た最後だったって事だけ。

「匠、手紙よ。美玖ちゃんから」
「ん？　……ああ」

――　拝啓
お元気ですか？　大阪は、私が見る八回目の桜がようやく開花を始めて暖かくなってきました。

そんな挨拶から始まる手紙は、昔は数日毎に続いていた。それでも俺は約束を守ってはなかった。手紙を出すと言っておきながら、今まで家のポストに届いた手紙の数分の一ほどしか投函したことがない。それも歳を増すごとに年々と減った。恥ずかしいと言う思いに書くことが浮かばない。次こそは返事を書こうと、机に便箋を並べたことは幾度と過ぎた。
その度にこんなことを書きたいんじゃないともみくちゃにして、入りもしないゴミ箱に投げた。翌朝いつも母さんにちゃんと捨てなさいと何度言われたことか。

そちらはもう桜は枯れてしまいましたか？　匠君と昔見たあの桜の木は今年も綺麗に咲いてましたか？　ちょっと懐かしいです。昔はとても大きく見えましたが、今も変わらないのかな？　それから、来年はいよいよセンター試験ですが、どこの大学を受験するか決めましたか？　私はまだ、迷っています。

最後の笑顔を忘れられなくて、よく覚えてなくて八年経った。今年俺は高校三年に上がった。すっかり周囲は美玖が転校したことなんか知らない奴らが、俺の知り合いになった。小学校の頃は毎日女子を交えて笑いの絶えない、登下校から休み時間までを過ごしたというのに、そんな生活が夢だったように、今の俺は女子の友達なんてほどんといない。クラスメイトの女子とは当たり障りのない言葉

の交わりしかしない。むしろ今は昔のことが嘘だったように女子と近くにいるのが苦手になった。何を話せばいいのか分からなくて、話しかけられても愛想笑いか適当に流すだけ。そんな毎日の中に、久々に届いたあの頃の美玖からの手紙。ベッドに横になって読む気にもなれず、封を開いた頃には窓の外が街灯と微かな隣家の明かりだけになっていた。

匠君は何か自分のやりたいことを見つけましたか？　昔はやんちゃでいつも私を引張ってくれて、ついて行けばそれだけで大丈夫だと思っていられたのに、今は自分で決めないといけないのだと、少し苦労しています。

文面から感じる美玖の変化は大きい。昔はこんな女らしい細やかで綺麗な文体じゃなかった。

「確か、ここに……」

二段目の引き出しの中。その中は昔から占領されていた。年々小洒落た封に入れられた手紙の束に。昔は汚い字で、ただ寂しいとか、そっちはみんなどうしてるとか、新しい友達が出来たよとか、そんな自分の経過報告ばかりだった。だから当時の俺は同じように俺のことばかりを書いていた。お前なんかいなくても全然楽しいぜとか、今日ゲーム買ったとか本当に下らないものを。次第に忘れていった過去が、いくつもあった。

それがいつしか美玖が俺のことを気にするように書いてきて、俺には遠い、読むだけで眠くなりそうな、小説に出てくるような言葉遣いになってきて、文字を書くのが苦手な俺には返事を出すのが億劫になった。

あの頃は俺が美玖を引張ってやればそれで良かったのに、いつの間にか俺にはもうあの頃のように美玖のことを引張ってやれるような、中身のあるものが無くなっていた。だから書くことが出来なかった。書こうといつも思っていたのに、書き出しすら思い浮かばなかった。

真似することもした。小説、漫画の台詞、歌詞、映画の台詞、手紙の書き方の手本、美玖の手紙。色んなものから真似ようとした。美玖よりも俺の方が知ってるんだと思わせようとした。けど、ダメだった。俺にはそんな才能はなかったと気づいただけだった。

どんなに書こうとしてもそれは俺じゃないと、手紙をくしゃくしゃにして放り投げた。

鹿児島にいるとやっぱり鹿児島大学、かな？　匠君は文系かな？　それとも理系かな？　私は文系です。数学とか科学はやっぱり昔から苦手で、英語は少しだけ得意になりました。成績はあんまり良くないけれど。まだ将来の夢とかちゃんと決められてないから、先生から面談でよく怒られてしまいます。お母さんもお父さんも、のんびりしてると色々と遅れるんだぞと、ちょっと馬鹿にされます。

可愛らしい文字と言うものが女子の文字だと思っていた。丸い文体でちょっと読みにくいくらいのが。でも、美玖の文字は嫉妬してしまうほどに達筆で、年々その手紙に記される文字が成長を示すように綺麗に成っていく。そして俺はその文字にすら劣り目を感じ、書けない。悔しいと思うことが強かった。どんどん遠くになっていく。そう手紙が届く度に、封を切る度に躊躇いが生まれてしまう。田舎と都会の違い。そう勝手に感じてしまう、いつかからか郵便受けに届いていない日の方が安心してしまう便箋。それでも俺は必ず封を切る。恐怖に近い躊躇いがあるのは事実。それと同等にやってくる高揚。それは遠く儚い宇宙へ星人へのメッセージを載せて飛び続ける人工衛星も同じ、かもしれない。絶対の暗闇の中を、見知るもの人も物も原子すらまともにない中を孤高に飛び続け、いつか辿り着く、未知への接触を夢に見て飛ぶ。比較にならずとも、揶揄においては都合がつく。そして、開いた封の中を見て、俺はまた返事を書こうと思い、挫折する。

匠君は大丈夫ですか？　私みたいにはないと思いますが、お互いに夢を目指して後悔しないように今年、そして、最後の高校生活を過ごしましょう。私たちが子供でいられる最後の時間だと思うので。

草々　――――

そうだ。いつだって美玖はそうだ。俺の後ろをついてきながら、最後の最後は離れていく。その時はいつだって笑顔なんだ。もう微かな記憶を引っ張り出しても、朝靄に浮かぶ桜の木のように、はっきりとしたものは浮かばないけど、その放つ色合いで、その微かなそれだけが持つ雰囲気と空気だけでそれが何であるのかを知ることが出来る、思い出すことが出来る精々の桜深（さくらみ）美玖の笑顔。ネットでブログやプロフが溢れかえっている中での個人情報の発信の多重する世界の中で、顔も見えなければ息遣いも聞こえない、膨らむのは気持ちと想像心だけの、温もりや冷たさは手に取るように感じられてしまう手紙を使って、俺の元へ帰ってくる。そしてその数分の一以下の確率で、俺は美玖の下へ行く。

大阪なんてすぐだと思った。鹿児島から飛行機で一時間。船で十三時間、新幹線を使って八時間ほどの鹿児島と大阪。それでも俺にはあまりにも遠かった。時間はいくら短くとも、俺は高三。どの道を選んだところで立ちはだかる壁は大きすぎる程の金。世の中は金なのだと痛感して、寂しがっていた美玖の下へなんか行くことが出来なかった。

命よりも大事なものはない。それが嘘だと痛いほどに何度も悩んだ。人は生きるために働く。そして金を得る。それはつまり、命を削ってまでして金を手に入れる。命が最も重要だと言うのであれば、働いて金を稼いでいる時間が削る命を、何だと心得ているのか？　そんな疑問に行き着いて、子供の頃の小さな世界というものが漣（さざなみ）の中に消えた。

〜　P．S．　〜

最近、色々と悩むことが多い時期のせいか、少しだけ昔の頃が羨ましく思います。もし、匠君がお返事を書いてくれる時間があるのなら、私の我が儘なので無理はしないで欲しいのですが、あの桜の木の写真が見てみたいです。いつもぐるぐると駆け回っていた、あの大きな桜の幹は、私にとって、かけがえのない場所でした。

二〇〇九年　四月　十三日　　桜深　美玖

何を書けば良いのか、どうしたら良いのか、読み終えた感想は深い、嫌になるくらいに気の重くなるため息が静まり返って、椅子の軋む音に消えた。

「八年か。長いんだろうな」

今思えば、浅はかな約束。遠い日の幼さの象徴。それをけなげに時間を費やしながらも成長の証を示すような手紙のやり取り。やり取りとも言えない送られてくる八年前から変わらない、俺の中にいる美玖。そして変わり続ける美玖。今俺が接しようとしている、返事を出そうとしている美玖がいったいどちらの美玖なのか分からなくて、背もたれに体を預け、天井を見上げた。

「桜、か」

天井を見ていてもう一度手紙を目の前に翳した。なんとなく一つのことが確証を求めようと脳裏を過ぎった。

「そうなんだよな……」

見つめる文字の羅列に記されているものは、美玖の世界。そして、一人きりだと言う美玖の世界があった。引き出しから取り出した手紙を、ようやく気づいた解れを探すように読み直し、確実のものだとひとつの答えに行き着いた。

「美玖は一人なのか？」

綴られる手紙の内容から感じたのは、いつも美玖は一人なのでは？　と感じずにはいられない記された文字の世界。行間に収まるそ

の世界は、美玖のことしか記されていない。俺に対してどんな友達ができたのかと聞いてくることは多いのに、美玖は自分の友達のことを一言も触れることなくその手紙を書き終えている。不安が急に小さな痛みを勝手に感じさせた。

「ゴールデンウィーク、考えてみるかな」

ドアの横にあるカレンダーの日付は、大型連休までそれほど残していない。受験前で予定もない。衝動的だった。その一言に尽きる義務感のような思いは、その文面を辿る度に夜更けと比例して大きくなった。

「行ってきます」

部屋の置くから母さんの見送りの声を聞いて学校に向かう。目を閉じてもほとんど道を違えることなく行ける自信すら湧いている通い慣れた通学路。手紙のせいか、家を出てすぐにある美玖が暮らしていた、今はもう別の家族の家となった家屋を見てしまう。今はまだ、美玖と過ごした時間の方が長く残る家。変わらない、少しずつ色褪せていく家なのに、そこに刻まれている温もりは、すっかり変わってしまった。

「おはよう、如月さん」

歩いておよそ十五分。近場の進学校に後どのくらい通うのかも考えたことのなかった高校の校門を潜る。早朝から聞こえてくる乾発音。裏門から入る方が早いせいか、フェンスに囲われた弓道場。野球部や陸上部に混じって、弓道部も朝練をしている。

「あ、おはよう、海津君」

その中で残りわずかな部活に精を出している如月さんがいた。

「今日も朝練やってるんだ？」

いるのは一人。夏の最後の大会まで期間があるというのに、登校してくると聞こえてくる乾発音が恒例だった。

「うん。朝は涼しいし、集中できるの」

実にハキハキとして、楽しそう。袴姿に映える集中力を何度も目の当たりにした。静かな闘志を一本の風切矢に託す凛とした弓道場

の空気は、見ているだけでも心地良かった。女の子がこんなにも格好良いと思ったのは、如月さんが初めてだった。
「頑張ってるんだね」
「そうかな？」
そう言いながら笑顔になる表情は、誇りと言うものを突きつけてくるような気がした。
「じゃあ、頑張って」
「うん、またね」
話すことは大していつもないのに、どうしてか挨拶だけは教室でもするのに、続いていた。
「桜の木……」
校内にも至る所にある桜。すでに葉桜と徐々に変化する疎らな緑と淡赤の木は、幼い日を静かに投影させる。どうして今になって、あの手紙には桜の木を見たいという思いが綴られていたのか。八年も経った。八年が経った。だから分からなくなる。消えかけたはずのあの日の笑顔が今、いったいどんなものになったのか、朝風に散る花びらの一つ一つになぜか痛みとなって手のひらに舞い降りてきた。

二抄．泡雪の恋

もし、この世界が才能で溢れているなら、その出会いは出会うと言う才能の元に生まれる。

もし、この世界が努力で溢れているなら、その出会いは努力で成し遂げた必然の元に生まれる。

でも、そうじゃない。偶然の出会いも必然の出会いも、あたしには努力でも才能でもないと思う。そこにあるのは運。出会えるか出会えないかなんて才能も努力も要らない。あるならそれで運が上がるだけ。どんなに頑張っても、町往く角を右に曲がるか、左に曲がるかでその出会いの有無は別れる。それはやっぱり運。一％の才能も九十九％の努力も関係ない。世界はきっと運で成り立ってる。その運が強いのか弱いのかが才能と努力の影響になる。それくらいに運は大きいもの。

「姉ちゃん、今日も朝練？」

朝五時。携帯のアラームに起こされてその日が始まる。たまにお母さんに起こしてもらうけど。

「大会もあるの。あんたみたいに帰宅部万歳とは行かないの」

家を出るのは六時。一時間の間に支度を整えるのは、もう慣れた。朝から長い髪を整えることもないし、寝癖がついても熱いタオルで抑える程度。

「大会って、まだ一ヶ月は先でしょう？」

季節は五月に入ろうとする。この時期はさすがに少しだけしんどいことが多い。試験に部活。高校生の忙しいなんて大人からすれば大したことじゃないんだろうけど、部活後に勉強なんて疲れてする気ないし、部活前に勉強するのも嫌。

「今年が最後だから早いうちから体を作っておくの」

五月の県大会がもう少しで始まる。その後は夏の全国大会。それで高校三年間の部活動が終わる。ついこの間に先輩を見送ったと思

ったのに、いつの間にかもうすぐその見送りを後輩がして、あたしは見送られることになる。本当に時間はあっという間に過ぎていく。八年もいつの間にか経った。あたしがこの町に引っ越してきて。初めは分からないことだらけだったのに、今となっては知らないことの方が少なく感じるくらい。

「それは良いけど、怪我はしないようにしなさいよ」

「姉ちゃん、早とちり多いし、おっちょこちょいなことして怪我すんじゃねぇの？」

「うっさい。つーかあんた何でこの時間に起きてんのよ？」

弟は中二。最近やたらと口うるさくなってきて、生意気になった。部屋にはエッチな本隠すようになってるし。それはあたしが処分したけど、弟がそうなるのは男の子だから当然なんだろうけど、何か嫌。お母さんはあまり気にしてないけど、嫌じゃないやっぱり。

「どっかの誰かさんのアラームがうるさいんだよ」

「はいはい。迷惑おかけしましたねぇ」

「うっわ、ムカつく。あーあ、早く高校上がって単車欲しいなぁ」

切り替えが良いのか、単に飽きっぽいのか、弟は最近単車が欲しいってよく言う。田舎だし自転車じゃあんまり遠くまで行けないのは知ってるけど、何度も聞くのは面倒になる。

「じゃあ、行ってくるね」

「あ、梓紗（あずさ）。お弁当忘れてるわよ」

そろそろ家を出ないと。そう思って玄関に行こうとしたらお母さんに呼ばれた。

「ぷっ。やっぱ姉ちゃん、だっせ」

「うるさい。行ってきます」

居間で朝のテレビを見てる弟の頭を叩いてから靴を履く。お母さんの行ってらっしゃいノ声と弟のいてぇなって愚痴もいつものこと。靴を履いて玄関の鏡で制服と髪の乱れのチェックをして、つま先で数回靴の位置を床に叩いて調整してからドアノブを下げる。今日も一日頑張ろうって思って。そして、今日も会えるかなって頬を緩ま

せる自分のことをちょっとだけ好きかもと思いながら。
「桜だぁ。うん、朝から良いことありそう」
玄関を開けた先に広がる光景はいつもと同じ。でも今日はその眩しく輝く朝陽の中に、ピンクの花びらがフワフワと風に舞いながらあたしに手を振るように飛んでいった。今日が運が良いかも。そう思って私の足は学校へと軽い足取りで地面を蹴った。

「よっ、匠。何だよ、何か面白いもんでもあんのか？」
「ん？　あぁ、おはよう。いや、何でもない。行こう」
感傷に浸る。朝からそんな学生はそういない。実に似合わない。自嘲の笑みを、先を促すことで打ち消す。こんなところで桜を見ていても、何も変わりはしないし始まりもしない。手のひらにあった花びらを開放し、友達と呼べる付き合いになって長くなる友達の、どうでもいい、そんな話を俺にする意味があるのかも分からない内容を笑って教室に歩いた。
「なぁ匠。今日暇？」
「何かあるのか？」
時間は集中するほど早い。授業中の長い時間も外を流れる雲を見ていても、休み時間の短さも、刻一刻と過去を遠ざけていく。
「せっかくだしどっか遊びに行こうぜ？」
その遊んでいる時間は、どのくらいだ？　そんなことをつい聞きそうになる口が今日はあった。
「いや、悪いけど遠慮しておくよ」
「何でだよ？　何かあんのか？」
肩を組んでくる図々しさを、僕は振り払う勇気もない。
「悪いな。野暮用があるんだ。また今度埋め合わせする」
「そっか。ま、用があんならしゃーない。次は絶対だぞ？」
「ああ」
そうして友達は予定が空き、退屈そうな声を漏らしながら薄っぺ

らいカバンを肩にかけて出て行った。必要なものだけをカバンに仕舞うと同じように席を立つ。
「海津君、今帰り？」
また明日—とかじゃあなぁ、とか聞きなれた見送りを受けつつ昇降口でひんやりと臭う靴の混ざった匂いの中で、履き替える。ちらほらと同じような人間もいれば、大きなバッグを背負った部活生の賑やかな声も放課後と言う開放的な空気が、あたり一面に溢れていて、どこか胸騒ぎのような孤独感があった。
「如月さん？　どうかしたの？」
すのこの上を跳ねるように駆けてきた如月さんが、えへへっと小さく恥ずかしそうに笑った。首を傾げるしか出来なかった。
「え、っと、用があったわけじゃないけど、海津君を見かけたから」
「そうなんだ」
隣で同じように靴を履きかえる如月さんを、どうしてか俺は待った。理由もないのに。
「如月さん、良かったら一緒に帰らない？」
「えっ？」
靴に履き替えてスリッパを靴箱に仕舞おうと屈み込んだ如月さんの顔が、驚きのような目で見上げてきた。
「良い、の？」
「途中までだけど、それでも良かったら」
「うんっ」
この時、何故こんなことを言ったのか、自分が分からない。気がつけば花壇の花が鮮やかに咲く中を如月さんと共に校門を潜っていた。
「あ、あのね、海津君……」
校門のレンガ床に蔓延るコケの緑も、校舎に伝う蔦も、朝の掃除から時間が経って誰かの自転車のかごに落ちた落ち葉も、全てがその中に淡いピンクの花びらを含んでいた。
「どうしたの？」

桜を美しいと、桜を綺麗だと八年前の俺は思うことがあっただろうか？
「ちょっと、寄り道、して行っても良いかな？」
あの頃はきっと、桜の木下には死体があるとか言う迷信を本当だと信じて、ふざけ話として恐がらせることで楽しんでいたかもしれない。桜に感じる儚さも鮮やかさもどうでも良かったんだ。
「行きたいところがあるの？」
「う、うん。あっでもそんなに時間かからないからっ。すぐに終わる」
如月さんはどうしてか焦りながら言う。時間はある。ただ、あの場所へ行ってみようかと確証のない予定を呆然と考えていただけ。
「良いよ、別に。今日は暇だし」
いつだって行ける。俺はこの町に残り続けているから。どこにも行かずに、ここにいたから。
「あ、ありがとうっ」
だから、今だけは如月さんの嬉しそうな顔に、同じように笑って返すだけだ。
「……」
「……」
夕陽に遠くが霞んで見える。遠い日の思い出が少しずつ色褪せていくように、東の空が見えなくなってきた。
「あ、あの、海津君」
「ん？　何？」
途中俺たちはコンビニともショップとも呼べないような小さな店で、ジュースを買った。俺はコーヒー牛乳で、如月さんはミルクティーだった。好みに口を出すつもりはないけど、女の子は選ぶのに時間がかかるものなんだって、いつものようにすぐに手にした俺とは違い、暫く悩んだ後に選んだ如月さんは俺にごめんね、と時間に対して謝った。美玖とは違う。そう思った。
「海津君さ、その、ゴールデンウィークとか予定ある、かな？」

車がほとんど通ることのない人気の少ない休閑地となっている畑の通り。夕陽の運ぶ風が少しずつひんやりとして来る。
「ゴールデンウィーク？」
もうすぐやってくる大型連休。教室に居る時はよく予定を立てている声や、退屈そうな声で話題が出る。浮かれる気分なんだろうけど、どうしても重たくなる気持ちしか湧かない。
「う、うん」
「今はまだ分からないかな」
行きたい場所はある。行けない場所がある。行くか行かないを選ぶのは自身の選択。それでもそれに伴うものがない以上、その選択すら選ぶことが出来ない現実。早く大人になりたいと思いながら、その一人の大人として降りかかる納税、勤労などの義務の責任を追えるかと考えると、明白に無理と言う答えが突きつけられる。人としての選択すらまともに出来ない俺は、子供と言う範疇で足掻くしかない。
「そう、なんだ……」
「それがどうかしたの？　如月さんは予定は？」
「あ、ううん、なんでもない。あたしも暇かも」
笑う如月さんに、俺はそっか、とコーヒー牛乳を茜色の空を見ながらの呑むしかなかった。
「ここに、来たかったんだ？」
「うん。今年はずっと部活だったから、一回で良いから見たくって」
俺は言葉が出ないというほどじゃないけど、どうして求めていたはずなのに、求めていたことを求めぬうちにそこへ辿り着いたことに、気が重くなったのか、ため息が消えた。
「やっぱり、葉桜になっちゃってるね」
バッグを幹に横たえさせた如月さんが、片手を幹に当てて、空を仰いだ。俺はただ思い出してばかりだった。
先日久方に届いたあの手紙にあった、今までになかった美玖の希望。その希望の先にある桜の木が、目の前に葉桜として残っている。

もう淡い花びらはどこにも見受けられない。
「海津君？　どうかしたの？」
如月さんが首を傾げて俺を呼ぶ。桜の木の写真が見たい。あの頃ぐるぐると回って遊んでいた。その木が目の前にあるのに、今だけはあの頃の思い出がそこに投影されない。
「相変わらず大きいなって思ってさ」
他の桜に比べて幹周りも太く、枝も多く力強い。枯れない桜とか咲かない桜とかそう言う伝説も何もない、毎年鮮やかに花開き人を楽しませるこの町のシンボル。そのくらいに樹齢も長く、多くの時を見てきた桜。
「木ってすごいよね」
如月さんが幹に手を当てたままそう呟く。
「ここにずっといるだけなのに、それしか出来ないのにずっとここで咲き続けてる」
選ぶことも出来ず、その木として生きることが決まった以上、走ることも飛ぶことも泳ぐこともしないまま、そこに立ち続ける。それは選択したが故の答えなのか、それすらも与えられることのなかった末路なのか、俺には分からない。
「ねぇ、海津君」
「何？」
「この町に、ずっと居たいって、思う？」
予測していなかった質問に、一瞬時が止まる。
ずっと当たり前で、それが当然だと思っていた小さな世界は、もう俺の中にないことは分かってしまった。誰だってどこにだって何にだって、そんなものはないのは知ってる。なら俺はこれから先、どうするのか。その選択をしなければならない日が確実に近づいている。
「どうかな？　如月さんは？」
俺は卑怯かもしれない。本当は分かってる。ただ、子供だからと自己暗示してその選択肢から逃れようとしている。それを八％の運

だと思いながら。
「あたしは、出来ればここに居たいって思うかな？　でも、もっと別の場所も見たいって思ったりもするんだ」
　如月さんはためらうことなく、少しだけ恥ずかしそうに言った。
「すごいね、如月さんは」
　素直に感心した。圧倒された。責められた気がした。
「そ、そうかな？　あたしは別に大したことじゃないと思うけど……」
「俺にはまだ分からないことだけど、如月さんはあんまり迷ってないよね。すごいと思うよ」
　思うんじゃなく、すごいんだ。俺にしてみれば。
「海津君の方が、しっかりしてるよ。あたし、まだまだ分からないことばっかりだもん」
　なら俺は、子供以下かもしれない。そんな自嘲は苦笑で流した。
「如月さんなら、何でも出来るよ。毎日あれだけ頑張ってるし。ついてこない結果はないはずだよ」
　弓道をしていることも、元気で明るいことも、如月さんは運を味方につけたわけじゃなく、きっと努力の才能で笑えているはず。羨望と共に失意もあった。
　恥ずかしそうな笑顔で笑う如月さんに、俺は遠い人のような疎外感に近いものを感じ、それから逃げるように桜を見上げた。
「写メ？」
　取り出した携帯で桜を撮影する。その写真をどうするかなんか考えてない。ただ、何となくの気持ちで撮影してみた。
「やっぱり暗いか」
「夕陽もそろそろ沈むもんね」
　撮影した桜は、輪郭がかろうじて残るだけで、それが桜の木かどうかの判断までは付かなかった。
「そろそろ帰ろうか？」
「うん。ごめんね、こんなとこにつき合わせちゃって」

「良いよ、別に。俺も見てみたかったから」
一人で来ることと、誰かと来ること。同じようで感じるものは全然違ったはずだ。だから一人じゃなくて良かったと思う。何度も読み返して文面を覚えてしまった美玖の手紙を、一人出来ていたなら、どう思いながら見上げていたか。
「でも珍しいね、如月さんがこういう静かな場所に行きたいって思うの」
弓道をやる以上、静けさのある集中力の高まりが大切なのは聞いた。だからおかしいことじゃないと思う。それでも如月さんは普段は明るいから、この静か過ぎるくらいに周りを畑と山裾に囲まれた何もない場所へ行きたいと思うのは、意外だった。
「もぉ、海津君誤解してない？　あたしだってこう言うところで落ち着きたいって思うことあるんだよ？」
「ごめんごめん、冗談だよ」
頬を膨らませ、隣を付いてくる如月さんはいつの間にかいつもの笑顔を取り戻していた。何かを思い悩んでいるような沈んだ表情が落ち着きを取り戻し、その反面俺は何かがのっかかって来たように、体に重みを感じた。
「おっ？　匠？　それに梓紗？　何してんだお前ら？」
俺たちの足が止まる。見通しの悪い十字路の角を見知った顔と鉢合わせをした。カーブミラーには俺たち三人がそれぞれ視点を合わせている、少しだけ細長くなった姿が映し出されている。
「あー、悪ぃ悪ぃ。そっか、そっか」
乾いた笑いが響く。そこに来る事を選んだ選択肢を後悔する笑い。
「ちょっ、木津っ！？」
「いやいや、これは俺が悪いな。うん。匠、お前もひどいなぁ。言ってくれよな」
「何を？」
慌てる如月さんとさっき別れたばかりの友達の木津。ここで会うとは思ってなかった。

「ま、誰にも言わねぇし、仲良くしろよ。んじゃぁなっ」
「あっ、ち、違うんだからねっ」
如月さんのそんな声も、呑気な木津の笑い声に届きはしなかった。
「誤解、されたみたいだね？」
如月さんが赤い。夕陽のせいかもと思いながら明らかに違うと一目で分かる。
「ご、ごめんね？　嫌だったよね？　明日、ちゃんと誤解解くから」
「良いよ、別に。噂なんてすぐに消えるよ」
いちいち食いついていても火に油だ。昔の俺ならそうしたかもしれないけど、そうしない俺が今はいる。なくなったから。その必要がなくなったんだ、八年前に。
「帰ろう。そろそろ暗くなってきてるし」
「う、うん……」
その後、何を話したかは覚えていない。特に何も話すことなく、民家のぼんやりとした明かりに照らされたアスファルトに薄く幾つも出来る影を歩かせただけだったかもしれない。
「それじゃ、また明日」
「うん、また。あ、あの、海津君っ」
分かれ道で別れようとしたら、背中に声がかかる。
「あっ……ごめん、なんでもない」
「そう？　じゃあ」
「うん……ばいばい」
気づかないわけがない。俺はそこまで鈍感じゃない。鈍感でいられればどれほど楽な人生を歩んでこられたか。如月さんの表情を見て一目瞭然だった。ただ、その笑顔を俺が壊すことは、出来ない。茫漠とした時間があまりにも俺を遠ざけてしまうから、今日は如月さんとあの桜の下へ行けたことを感謝する思いだけが残った。

三抄・時の刻印

いつからだろう。知識と言うものを常識に取り入れ、世界の広さに夢が膨らみ、世界の広さに絶望を抱くようになったのは。

「匠、ゴミがあるなら出しておきなさいよ。明日は収集日よ」

「分かってる」

部屋の片隅に対して詰まったもののないゴミ箱。入っているごみの中に白い紙が皺を作って重なっている。

―――拝啓

早くも夏の日差しが煌々とバラの花を照らす鹿児島ですが、そちらはどうですか？

この間は手紙、ありがとう。

いつからだろう。その文面に真似をするようになったのは。そしていつからだろうか。そこから続きを書くことが出来なくなったのは。

今日、帰りに恐らくほぼ間違いなく勘違いをされた。如月さんが俺の彼女として、俺が如月さんの彼氏として。それでも感じるものに嫌悪感はない。元々クラスメイトとしてよく会話を交わす方だ。その影響に絆されていると言うものもある。

「書けないな……」

遠い星へ飛んでいく衛星は、そこへ辿り着く前に故郷へ帰りたいと思うことを感じることはない。機械という物でしかないから。だから僅かばかりの羨望を抱く。そう割り切ることが出来たのであれば。もしくはもっと強い思いを抱くことが出来るのであれば。俺はどうしたいのか、どうすることを望んでいるのか。この数日の間に見る夢は走馬灯のように過去を巡る。翌朝にはどんな夢を見ていたのかも覚えていないのに、そう思った。

「あ……海津君」
「おはよう。どうかしたの？　元気ないんじゃない？」
今朝は如月さんは弓道場にはいなかった。当たり前だと思っていた朝練の光景がないだけで、俺は何かの欠落を感じ、選択という言葉が当たり前のものを今日は変えたのだと、一人木漏れ日の中を教室へ歩いた。
「あ、えっと……」
困り顔で俺を見られても、事情が分からない以上、それは分からない。
「よっ、匠」
馴れ馴れしい声が肩に乗る重みと共に朝の爽やかな空気を払拭する。
「早速噂のライトがお前を照らしてるぜ？」
「何、それ？」
意味が通じない。
「とぼけんなって、恥ずかしがるなって。梓紗を見てみろよ。まんざらでもねぇって否定してねぇんだしよ」
ああ、そういうことか。誰にも言わないといっていた覚えがあるが、この男の口は堪えることを知らないんだ。
「ただの噂だ。本人が違うと言ってるんだ。だからそれは違う」
「ほぉ、否定すんのか、お前。当人同士意見が割れたな？」
茶化す言葉に乗ることは術中に嵌まること。相手にしなければそのうち鎮静化する。元よりそんな気分じゃない。
「ごめん、如月さん。迷惑かけてるね。あんまり気にしないで。俺も気にしないから」
「え？　あ、えっと……うん」
その言葉が壁となり、それ以上の進入を防御する。拒否かもしれない。
「初々しいねぇ。この新婚がよ」
肩を叩かれるが、気にせず窓側三番目の自分の机の椅子を引く。

朝陽の暖かさをじんわりと感じる窓辺からは、どこまでも遠い空が今日も綿雲をどこかへと連れ去っていた。
「ねぇねぇ、聞いた？　海津君って梓紗と付き合ってるんだって」
「えー？　うそぉ？」
「うん、聞いた聞いた。何か諏訪神社の外れにある桜の所で二人でいたって。それも何かいい雰囲気だったみたい」
「えー。そんなぁ……」
聞こえてくる女の子たちの噂話。どうやら木津の漏らした言葉だけじゃない。誰かがあの桜の木にいるところを見ていたのか。ため息が出た。そんな話を聞くのはうんざりだった。

「でさ、梓紗。実際のとこどうなの？」
遠くにあった世界が近づいた気がした。見つめるだけでドキドキして、言葉を交わすだけで安心できて、ただその為だけに小さな嘘を付いて早く登校する。ささやかだけど、それが嬉しいと思えた。
「だ、だから違うんだって」
「そう照れ笑いで言われても説得力ないって」
大きなことじゃない。他の男子は関心持ってないし、女子だって数人が休み時間のおしゃべりの話題の一つに楽しむだけ。女の子だからそう言う話しが出てくるのは当然。大したことのない学校生活だから、少し仲のいい友達以上なら、そんな話はいくらでも尾ひれがついて駆け巡る。
「ほ、ほんとに海津君とは何でもないよ」
「でも、あんた好きなんでしょ？」
見透かす言葉は言葉をつまらせる。
「ほらやっぱり」
そして起こる笑い。あぁ私遊ばれてる。すぐに分かることなのに、不思議と嫌じゃないと思う自分がいる。
「海津君とはただの友達だってば」
視線を少しだけずらせると、窓際の前から三番目の席に彼がいる。

休み時間でもあまり他の男子と話そうとはしないで、窓の外を見ている。時々木津が茶化しに来ても、手馴れたように海津君は受け流す。
「でもあんたってああ言うのが好きなんだ？」
私たちの視線は海津君に向く。でも、海津君は振り返ってはくれない。振り返られてもちょっと困るけど。
「あたしも良いなぁって思うけど？　頭、顔、運動神経良いし、クールと来れば文句ないでしょ？　堅物でもないしさ」
「優しいしね？」
「な、何で私を見るの？」
えーだって。ねぇ？　含み笑みが私を恥ずかしくさせる。でも同時に胸の中にあるものが離れていくような哀しい痛みを感じさせる。
「まぁあれよ。付き合ってないとしても、これだけ噂がある以上、それを利用しない手はないわね」
「そうそう。一気にいっちゃえ、梓紗。今が押し時だって」
私の目の前に道が示される。それは火のないところに発生したあるはずのない煙のように、事実無根から生まれたあるはずのない選択肢であって、選択肢にならない思い。
「そうよ。運をものにしないで何を得ようって言うのよ。あんたは今、ついてるの」
「つい、てる？　私が？」
何もしていない。ただ海津君と少しでも一緒に居たいって思って、人が少ない場所へ行っただけ。何かを期待してたわけじゃないけど、期待してないわけでもない。だから安堵する私と苦しい私がいる。
「何ならお膳立てしちゃう？」
「そうね。梓紗に期待してもじれったいだけかもしれないし」
「や、やめてよっ。そんなこと。絶対ダメだからねっ」
私はまた笑われる。今度こそ恥ずかしさで海津君に今の会話が聞こえていないことを心から思った。

「美玖、そんなに毎日郵便受け見て何を待ってるの？」
「ううん、なんでもない」
来ることを待って、来ることを望んでいるのか分からない複雑な思いは、私をいつも郵便受けに足を運ばせる。最後の日、彼は姿を見せてはくれなかった。分かっていた。彼が来ないことは。出来ることなら私も彼が来ないことを神様にお願いしていたから。
「それよりも、そろそろ三社面談の時期でしょ？　進路は考えたの？」
お母さんは最近、私にその質問をする。娘の将来を案じる親の心は、私にはまだ良く理解出来ない。どうするのか、周りの友達に聞いても返答は曖昧。行きたい大学を口にしても、それはあくまで夢と言う希望。具体的なビジョンを持って取り組む子はそんなにいない。
「鹿児島……」
「え？」
背中を追っていれば、恐いものなんて何もなかったあの頃。保障も確証も何もないのに、ただついていけばきっと大丈夫なんて小さな思いがあったあの日は、もう今年で九年目に入ろうとする。今まで何通の手紙を出したのか、私は覚えている。五百七十三通。九年という歳月からしたら、少ないかもしれない。約一週間に一通送っている計算。でも、そうじゃない。この前出した手紙は三ヶ月以上ぶりに書いた。毎日のように書いては郵便受けとにらめっこをしていた小学生の私はもう、今はいない。彼から綴られる何も変わらない、私のことを案じてくれるわけじゃなくて、自分のことをたくさん教えてくれる彼からの手紙は、全部で三百七通。今年に入ってからはまだ届くことはない。
「もう、変わってるもんね……」
人は変わる。早い人は数日で。遅くてもこれだけの月日が経てば、どんな人でも変わる。人の選ぶ道は九割を占め、あとはどう変わるかの運が八分に才能と努力がそれぞれ一分。私だって変わらずには

居られない。大阪弁も話せる。ついていくだけでも足がつりそうになった早い歩きもついていけるし、誰にでもそうすることが当たり前みたいに話しかけてくる人たちにも笑顔で言葉を返すことが出来るようになった。彼の後ろをついていくことが世界の全てだと思っていた私も、いつの間にか私が選んだ道を私で歩いている。

「どうしたの？」

「ねぇ、お母さん。私、夏休みにでも鹿児島に帰りたい」

「どうして？」

用のない土地。そういえば昔住んでたことがあったわね、と昔話に出てくる記憶の地。染み付いた思い出も、時が経てば色褪せ美化される。人は過去を変えていく生き物だから。だから人は選び、辿り着く場にあるものを幸か不幸の運と言う答えに結びつける。

「鹿児島の大学。うん、そう。オープンキャンパスに行ってみたいの」

とっさの言葉。私の中に残る思い出の地と思い出の人のいる鹿児島。簡単にいけないことは分かってる。だから私は行きたい思いをお母さんに伝える。

「鹿児島ねぇ。簡単に言うけどお金もかかるし、大学ならこっちの方が良いでしょ？」

大阪よりも良いとなると、その先の選択肢はほとんどないことは分かってる。情報、文化、風土、利便、鹿児島に勝る大阪に居る以上、私の選択はおかしいと思われて当然なのは理解している。だから、私はその選択を信じる。努力も才能も使わない、運が私にそう囁いたから。

「でも行きたい。行ってみたいの」

それでも、困り顔のお母さんは返事をくれなかった。

「お父さんが帰ってきてから相談してみなさい」

私は子供。一人で決められるものは少なくて、大人になりたくないと、ずっと彼の背中を追いかけていたいと子供でいることを願ったことが、今は虚夢だったように大人と言うものに焦がれた。

「今日も部活？」
「うん。海津君は？」
いつかの放課後。スズメが駆けていく風の吹かない五月のいつか。雨後に香る草の青さとアスファルトから漂う湿気を帯びた懐香。日の沈みが少しずつ時を得る放課後、昇降口で如月さんと並んでいた。漂う靴の匂いに置き忘れにされた傘、灰色の空間を包み込む湿気も気づかなければどうでも良いものでしかない。
「帰るよ。他にすることも無いし」
することはない。感じるものも思うものも薄れていく日々の中を、終わりのない時を描くようにただ繰り返す。それが学生だろうと大人だろうと変わりはない。なんて小さな世界だろう。
「そっか。じゃあまた明日ね」
「部活頑張って」
「うん」
校門と裏門は正反対にある。別れて振り返ると小走りで弓道場へ向かう如月さんの姿が遠くなる。昇降口は選択肢だった。
四月の後半に届いた手紙の内容は覚えている。何度か返事を書こうと机に便箋を開いては、捨てた。それからもう数日が悠に過ぎた。忘れたわけじゃないけど、封を切ったその日の思いは日に日に薄れていく。それが残酷だと謳う者がいれば、それが本能だと謳う者もいる。
「写真、送ってないな……」
ちらほらと視界を出入りする同校生を映さないように角を曲がり、暖かな夕陽を薄暗くさせる神社の守り木を通り過ぎ、人気のない砂利道を踏みしめる。なぜか切なさと心地よさが気分を落ち着かせ、愉快にさせる。
「大きかったんだな」
それが不意に気を重くさせる。あの大きな桜の木と美玖が思っていた桜は、やはり当時の圧巻さをかき消されたように孤独だった。

感じるものは何か？　伝わるものは何か？　甦るものは何か？　考えることを忘れた。

「何がしたいのかな、俺」

　返事も書けず、美玖の変貌を認めたくない。認めてしまえばそれは事実。取り残される俺がどうしようもないほどに情けなく過去の己との変貌に打ちひしがれているのだろうか。取り戻したい過去が何なのか、何をどう取り戻したいのか、選択という九割の道も運も才能も努力も出てこない。導のない道を行って辿り着く場所はあるのか。他愛ない話と下らない日常の繰り返しは、過ごす今は長く、過ぎた今は短い。誰も居ない桜は孤独にそこで立ち続け、俺も日が暮れ、緑の森林が黒く染まるその頃まで、ただ呆然と過ぎ去る時を浪費した。

　ゴールデンウィークの連休に入ると途端にすることがなかった。課題として出された宿題も、することもなく二日で済まし終え、いよいよすることがなくなった。代わりに机の上に置かれたままの一枚の白紙。銘打ってあるものは進路希望調査。クラス番号、出席番号、名前、第一希望から第三希望の進路記入欄が実線でそれぞれ囲われている。去年は文系理系で周囲はどうするかちょっとした話題になっていたことがあった。俺は迷わず文系を選んだ。特に意味はなかった。理系でも良かった。そうしなかったのは、深い意味はない。きっと友人と呼べるだけの付き合いを構築していた人間が大半文系へと決めていたから、それに巻かれるように選択をした。運は悪くはない。後悔することもない。友人付き合いは相変わらず続いている上に、勉学に関してもさほど困ることもない。

「大学か、専門か、就職か」

　進路を考えたことはいくらでもある。それは所詮漠然とした、酸いも甘いも知らない幻想でのこと。事実を客観視した上での判断など、高校生には出来るはずがない。親に甘え最終決定権を握る親元で飄々と暮らしているのだから、自己意思のみでの判断は危険ではないか。失敗し、挫折することで人は学ぶ。犯した罪は犯す前には

分からない。俺は迷うことなくいくつかの大学を空白に書き込んだ。迷いはある。当然だ。そこへ行けたとしてどうするのか。そんなことは知らない。知ることをしなければならないと頭で分かっていても、実感がない。

「オープンキャンパスか……」

学校にあったいくつかのパンフレットを持ち帰り、深い考えもなく読む。謳い文句は決まって楽しいという言葉。実際に大学が楽しいのか、分からない。楽しもうと行動的になればそうかもしれない。誰かに声をかけてもらえるなどと期待しているだけで行動しなければ面白みの欠片もないキャンパスライフがあるだけだろう。人間はいつでも自分が動かない限り、世界は変わりはしないんだ。だから選択という道が常に存在する。

「そういうことか」

あの日、いつだったか月日の記憶は定かではなくなった、あの日の美玖の言葉。

《あのね、私、人は一％の才能と一％の努力と八％の運だと思うの》

本当にそう思う。宝くじを当てるのに才能も努力もいらない。今年こそ当たると信じて毎年当たらない人間はどれほどいるものか。一等が出た販売所に行ったからといって、そこで買えば当たるわけじゃない。それは運だ。美玖と過ごした幼少は才能で得たものでも努力で維持したものでもない。運が良かったから美玖と思い出が残せた。運が悪かったから美玖は大阪へ越した。ただそれだけ。そこに選択というものはなかった。当時の選択というものは親による強制と同意だったはず。子供だから大人の言うことは聞きなさい。その一言が子供から選択を奪った。

なら大人は選択をすることを孤独に決定できるのか。子供には強制として圧力をかけることが出来る。ならば大人はその決定権を個人で採択できるのか。それは違う。子供にはなかった責任と言うものに、大人の選択もまた、縛られる。

「世の中は全てが運ってことかもしれない」

選択という言葉は存在しない。国の方針を決めるのは個人の選択では通用しない。だが、交差点をどちらに曲がるかの選択は個人の選択が通用する。個人の選択は全てが運であり、誰が為の選択は才能でも努力でも運でもない。なら、それは何なのか。

「考えるだけ無駄か」

俺には誰が為に選択することなどない。考えるべきは己。選ぶものは己が先の道。ただ立つことが生きるに繋がる木ではないんだ、俺は。

「母さん、父さん。ちょっと相談があるんだ」

夕飯時、俺は運を信じ、選択した答えを言葉に変えた。まだ少しだけ涼が網戸の目から入り込む星空が雲に覆われ、翌日の天気が雨だとニュース番組から流れた時だった。

四抄・未知の地

いつ以来のことか。夕食時に両親を前にして緊張と言うものが食欲をかすかに減退させた。

「相談？　どうしたの？」

「何かあったのか？」

いつ以来のことか。両親を前にして本音を吐くと言うことに恥ずかしさを感じてしまい、俺の言葉を待つ親の顔をまともに見る気になれない。

「あのさ、今年の夏のことなんだけど」

夕食はマーボー茄子だった。食欲をそそる香りの立ち込むダイニングは、久々に感じる静けさがテレビの音を遠くにさせた。

両親は思いのほか好意的に話を聞き入れてくれた。大阪大学へのオープンキャンパスへ参加することを。受験の夏だと言うのに、俺が今まであまり勉強のことや自身のことを話すことがなかったからか、意欲的になっていたからか、夏休みに大阪に行きたいという申し出は、俺が考えていたほどの反対意見もなく、オープンキャンパスの日付と飛行機とホテルの予約をして、費用を教えろということで話が付いた。

夕食後、風呂に入り自室へ戻る。火照った体を窓から入る夜風に晒し、壁に背を預け座る。心地よい時間。テレビなんか部屋にはない。元より最近はあまり番組を見ていない。見ているのは過去からの問いかけ。

「全部、覚えてるんだな」

体をベッドに預けると軋む音と反動の揺れに体が波打つ。引き出しから取り出した手紙の束を広げる。

「美玖ってこんなに書いてたのか」

広げた束はどれほどあるのか分からない。五百通以上はありそうだ。最近のものは実に女の子らしい、もらう方にすれば恥ずかしさ

すら覚える淡い色の封筒。レターセットなのだろう。俺が出す手紙は普通の白封筒の飾り気の欠片もないもの。やはり女の子は男とは根本的に異なるものだと、その歴史を広げた束から感じる。

それでも俺の手はいくらかの手紙を開き、そこで重みを感じる。

「美玖、どうしてこんなに一人なんだよ……」

心を抉るような不快感の痛み。やはりどの歴史を取ってみても美玖は一人だ。俺の知らない場所にいるのだから、俺の知っていることを教えてくれようとして、そうなのかもしれないが、俺にはそう思うことがどうしても出来なかった。

俺と美玖の関係。恋人でもなければ兄妹でもない。ただの同級生だ。幼馴染と言うものの定義に入る部分はあるかもしれない。それでも記憶にあるのは同級生という範疇に収まる程度。だから余計にその手紙に綴られる美玖一人の大阪からの手紙は、安堵よりも不安を抱いてしまうんだ。

「住所は、あるんだよな……」

書かれている住所は、俺の知らない土地。大東市という大阪の市。どんな所で美玖が八年前から過ごしているのか、オープンキャンパスのパンフレットに記された日付を、最後に届いた、最も新しい美玖の軌跡と共に蛍光灯に照らし当てた。

五抄・夕陽への距離

まだまだだと思っていた大人への道。早く大人になりたいと焦がれていた子供だった最近も、いつの間にか大人になるのが恐いと思うようになった。

「今日もダメダメだなぁ、私」

結局何も出来ないまま。海津君は今日も一人、窓の外を見ていた。凛々しいとかクールとか周りは言って私を囃し立てる。それを海津君はいつもの笑顔で受け流して、私はどうしたらいいのか分からなくて恥ずかしくなる。

「何だよ？　梓紗。そんな杞憂とか似合わないことしやがってよ」

「っ！？　な、何？」

不意に叩かれた肩。海津君のことばかりを考えていたから、全身が硬直した。

「よっ。残念だったな、匠じゃなくて」

「き、木津？　何？　何か用？」

学校帰りの住宅街路。後ろから来た自転車に木津が乗って私を笑ってた。急にさっきよりも恥ずかしくなる。

「お前にいい知らせを持ってきてやったんだよ」

「良い知らせ？」

不思議。海津君と話す時は苦しいくらいに胸がドキドキして、哀しいくらいに温かいのに、木津が相手だとそんなことがまるでない。

「匠のやつ、今日も諏訪神社に行ったってよ。会いに行くなら今のうちじゃねぇの？」

ドキッとした。海津君と話をして居る時とは違う、授業中にふと視線を向けた時に見える黒板に視線を送っている海津君を見ているような、友達と談笑している海津君を遠目からしか見ることが出来ない時みたいな、緊張とちょっとだけの満足感があった。

「な、何であんたがそう言うこと言うの？」

暫く沈黙があった。数台の車のエンジン音が会話を打ち消すように通り過ぎた。少しだけ鼻につく臭いを軽く息を止めて過ぎるのを待った。

「別に。梓紗のことはバレバレだし、匠も匠で何か馴染めてないっつーか、孤高で一人でいるような気がしてよ。だったら、ここは匠に噂があるお前を立てた方が良いって思ったわけ」

木津の言葉は私を辱めるには十分すぎた。顔が熱くなった。焦りの脈動が急に大きくなった。

「どうせあと一年もねぇけどさ、やっぱダチとしては楽しく過ごしたいじゃん？　何か匠はずっと遠くを見てるみたいだと思わねぇ？」

「う、うん……」

私だけじゃないという安心感と、やっぱりと言う落胆が同時に押し寄せた。夕陽の寂しさが痛かった。

「まっ、そーゆわけ。つーことで頑張れよ。お膳立てくらいはしてやるぜ？」

そんなものを知らないと言ってるような呑気に笑う声に、私は素直になれなかった。

「うっ、うるさいっ！　余計なことしないでっ」

「へいへい。まっ、行くなら早く行けよ。あいつ帰っちまうかもしんないぜ」

そう言い残して木津が私に背中を見せて自転車を走らせて行った。海津君みたいにまっすぐな背中じゃなくて、丸まった頼りなさの漂う背中に、私は小さな感謝を心で呟いた。

足が軽くなった気がした。空も飛べそうな、水の上でも立てそうな。そんなことはないのに、私の足はあの場所に向かってた。あってどんな話をしたら良いのかとか、どうしてここに来たとか、そんなことを考えてからにした方が良いと気づいたのは、境内の砂利道を歩いて、その後姿が見えて、足が立ち止まった時だった。遠目でも分かる木津とは違う綺麗な背中。あの背中にぴったりと背中合わせにくっついたら、どんなに嬉しくて幸せになるかな、とか思おう

としたけど、私の胸は哀しさだけをもたらした。
分かっていた。木津だって知ってた。海津君はきっと私が見ている場所よりもずっと遠くを見てる。この前一緒に見上げた桜の木を、今日も海津君は見上げてた。その横顔は涼やかで優しくて穏やかで、とても憂いを帯びていた。私はあんなにも鼓動が高鳴っていたのに、神社に立ち入ることの出来ない何かのように、その場所へ踏み出す勇気がなかった。
「誰？」
「あっ……」
感じの違う空気が私にまで届いた。
「あぁ……どうしたの？」
違った。空気が届いたから彼が振り返ったんじゃない。私の足が、ほんの些細な足幅が砂利を踏みしめていた。でも空気は変わった。彼一人の為だけにあったような、張り詰め燐とした空気が、私に合わせてくれたように優しい笑顔と共に私の頬を夕陽の温もりを失いつつある風が撫でて消えていった。
「えっと、特に用はなかったんだけど……」
言えるはずがない。彼の時間を邪魔してしまった悔いと緊張と何をしたいのか、戸惑いが視線を逸らされる。
「桜でも見に来た？」
「あっ……」
優しい笑顔。優しい気遣い。優しい声。海津君の全てが優しくて、私は泣きそうになる衝動を必死に押さえた。
「……うん」
恐いものなんて何もないのに、今が恐かった。海津君を見つめる度に、その声を聞く度に、何かを失う予感がした。
「こっちにおいでよ。そこからじゃ良く見えないんじゃない？」
「……うん」
一歩を踏み出す足が、少しだけ震えた。踏みしめる砂利音が恥ずかしかった。

「やっぱりこういうのは落ち着く？」
海津君は桜を見上げて、私を見た。
「う、うん。ここは静かだから」
だから何？　静かだからどうしたって言うの？　私の中にそんな言葉が反芻する。
「本当に静かだね。何もないみたいに」
彼の言葉を私は捉えきれない。単純な理解で済むならきっと、こんなところには来ない。風のささやき、木の葉の小声、夕陽の眩しさ、擦れる砂利。世界の音が私の心臓の音に敵わなかった。
「何かあった？」
優しい。すごく優しい。私に何があったのかを気遣うその笑みに心が躍る。
「……海津君」
ドキドキする胸の痛みに効く薬はない。そんな考えは中学生なんだろうね。そんなことを考えながら、私はどう言葉を続けるべきか緊張でよく分からなかった。
「大学……」
「ん？」
何言ってるの、私？　とっさに出てくる言葉に、私自身が混乱していた。海津君が私を見てる。それだけで何も考えられないくらいにドキドキするのに。
「あ、その、進路、どうするのかなって……」
この前配られた進路希望調査の紙のことがとっさに出てきた。
「進路か。……とりあえず、そこにでも座ろうか？」
「う、うん」
境内にある古寂れた木のベンチ。海津君はその上に舞い落ちた落ち葉を払うと私を誘ってくれた。優しい。そんなことをされただけでも、私の心は温かくて気持ち良い緊張をくれた。
「それで、進路、だっけ？　如月さんは決めたの？」
どう切り出すのがいいか分からない私に気づいてくれたのか、海

津君が話をリードしてくれる。ホッとする反面、何も考えてないことなんか言えるはずがない中で、どうすればいいか、焦った。
「実は、まだ良く考えてないの。でも、とりあえず進学かなって」
苦笑した。照れも入ってたから自分のことなのにすごく恥ずかしかった。
「そうなんだ。やっぱり鹿大？」
そんな私のことを、海津君は笑わない。だから余計に恥ずかしくて、でも茶化したりしないでちゃんと聞いてくれてるって嬉しさに、私は顔を上げられなかった。
「そうかなぁとは思う。県外は親がなかなか許してくれないから」
まだきちんと話してないけど、きっと県外はダメだって言われる。
「弓道の推薦とかは？」
「たぶん無理だよ。私、そんなに良い成績じゃないし」
ひざを閉じた。そのひざに手を乗せた。私は小さくなったと思う。でも、隣だけは見れなかった。
「そうかな？　毎日頑張ってたよね？」
不思議そうな声色。私の心は締め付けられた。海津君は私のことを信用してくれてるんだよね？　でも、私はそんな海津君を裏切ってる。毎朝誰も居ない道場で弓を構えているのは、
（貴方が、来てくれるからだよ……）
考えただけでも体中が熱くなる。絶対今顔が真っ赤になってる。でも、言えなかった。ちょっと泣きそうになった。
「か、海津、君は？」
絞り出した声。罪悪感と緊張におかしくなりそう。
「そうだね、今のところは大阪の大学、かな」
その瞬間、感じていたものが手に救った水が消えていくみたいに、気持ちがさぁって引いた。
「え……？」
ただ驚きしか感じられない。うそ、でしょ？　それしか考えられない。

「大阪？　どうして？」
人の進路。誰がどこの大学を受験しようと、それはその人の選択。私の才能や努力で決められるものじゃない。なのに私は、焦りも感じてた。
「うん。まぁ、なんて言うかな？」
海津君らしくない、迷う言葉。その瞬間、私には嫌なものが冷たい風の中から吹きついた。
「行ってみたいって思ったんだ」
それは夢を追い求める少年のような瞳だった。私なんかが近づいちゃいけないって、誰も何もそんなことは言ってないのに、感じてしまった。

六抄・選択の夏

こんなことを俺はどうして口にしたのか、自分で言っておきながらおかしさすらあった。

「そう、なんだ。何かやりたいこととかあるの？」

如月さんは珍しく俺のことを聞いてくる。夕陽が眩しい。

「実はさ、昔大切な友達が居たんだ」

それ以上を彼女に話してどうする？　俺の中に居る俺が語りかける。そうだ。美玖のことは如月さんは知らない。話したところで何を求めようと言うのか。

「その人に会うために、大阪に行くの……？」

グッと何かにつままれたような、小さな痛みがあった。

俺は何故、大阪を選ぶのか。鹿児島の人間は東京よりも大阪に出ることが多いという話は、何度も聞いたことがある。その理由は定かではないが、それでも俺は東京よりも大阪を選んだ。

――何の為に？

――美玖の為に。

――何をする為に？

――美玖に会うために。

それだけの理由しかない。会えるということは、きっと考えるだけでも少ない確率。連絡を取ることができる。その時に伝えればいいだけのこと。でも、俺は未だに白紙の用紙と向き合い、挫折している。そんな俺が書くことが出来るのだろうか？

昔の俺が今に居るならきっと、美玖には何も言わないで、突然その住所に尋ねてびっくりさせてやるくらいの行動力があったかもしれない。でも、今の俺にはそんなことをするだけの勇気も行動力も金もない。思うだけ思い、その選択をすることが不可能だ。そう、俺たちは子供であって、子供ではない。世界を知ってしまった。知らなくても良い、小さな世界から飛び出そうとしている。そうする

ことが自立であり、独立への、大人への一歩なのだと、大人を見てきて覚え、教わってきたんだ。
だから俺は、如月さんが進路に迷いを見せていながらも、その選択を選んでいるというのに、俺は自身の愚かさに、如月さんの問いかけに答える答えをすぐに見つけられなかった。ただ、昔中の良かった友達に会うために大阪に行く。それは子供の選択であり、大人にはそんな選択は甘えでしかない。
「会えれば良いかなって感じだよ。それが目的ってわけじゃないかな」
俺は嘘をついた。こんなにも真面目で懸命な如月さんに嘘をついてしまった。ひどい罪悪感があった。
「そう、なんだ……」
如月さんは小さく唇を噛み締めていた。その姿に胸が痛んだ。いつも笑顔で明るい彼女に俺はそんな表情をさせてしまった。そんなことをする俺が、他人の進路へ何をすることが出来るのか。いや、きっと何も出来ないんだ。ただ美玖に会いたいから大阪に行く。それしか目的ではないけど、それだけじゃいけない。俺たちはこれからも生きていくんだ。だからこそ、進学するにも就職するにも理由が要る。その理由がないまま、俺は大阪へ行ってしまっても良いのだろうか？　分からなくなった。
沈黙に風が何かを囁いていく。何も言えなかった。気が重くなる沈黙だった。砂利の上を転がる落ち葉がこんなにも弾む音をしていたなんて、気づきもしなかった。
「あ、あのね、海津君」
「うん？　何？」
それを打ち破るように、頑張ろうとしているように如月さんが口を開いた。俺は安堵した。それと同時に気を使わせてしまったのではないかと、申し訳なかった。
「……」
「……」

俺は待った。如月さんの言葉を。吟味するように、苦悩するように、如月さんは数回のため息を深呼吸に変えていた。
「海津君は、今、付き合ってる子は……いる？」
懸命だった。夕陽の中でも明らかだと分かる赤面。脈動が強かった。すぐにタイミングを間違えた。今の話は聞かなかったことにして。そう言うように如月さんは顔を伏せた。その瞬間の瞳に映る煌めきに、俺は一瞬思考と感情を奪われた。
「ごっ、ごめん。変なこと、だよね……」
そして、それが事実になった。俺は胸の奥に溜まった重たい空気を吐き出した。数秒をかけて。
「いや、いないよ。誰も」
「ほ、本当に？」
この世界に悪魔が居るなら、今の俺はその悪魔の手のひらで蠢いているのかもしれない。それでも、俺は質問には偽りなく答えた。恋人なんか居ない。特定の人なんかいない。底に偽りはない。それでも、俺はそれが嘘だという内面の告白に言葉の選択を誤ったと確信した。
「うん。本当に」
ただ、今だけは如月さんにそれ以上思いつめた表情をさせたくないと、そう心から思った。
「そ、それじゃあ、その、大阪に居るお友達は……？」
心臓が跳ねた。よく言うその表現が具現したのかと思った。嘘の中の真実。美玖という友達。恋人でなければ思いと伝えたことも伝えられたこともない。好きなのかと聞かれても、それがどういう感情で今まで手紙のやり取りをしていたのか、答えられない。
「なんて言うのかな？　幼い頃に良く一緒に遊んだ子なんだ。今はどんなことをしているのかとかどんなに成長したのかなんて、全く分からないんだ」
写真のやり取りも、声のやり取りも何もない、ただの文字による成長の手紙。俺が思う美玖の姿はあの八年前のままで、今でも俺の

心に居る手紙の主は、あの頃の美玖でしかないんだ。だから会いたい。声を聞きたい。その姿を見つめたい。そう思う衝動がある。ただ、もうその衝動だけで行動できるほど俺は幼くはない。だから、理由が欲しいのかもしれない。その選択をすることが、俺の一パーセントの才能と努力の結果であり、八パーセントの運の導いた答えだという理由が。

「そう、なの？」

「うん。だから、今会えても分からないかもしれない。分かるのは筆跡くらいだから」

お互いにきっと気づくことの出来ない成長。それは寂しく、哀しい反面、それが当たり前だという事実は八年前に始まっていた。当時の俺が今の俺の歳なら、きっとバイトでも何でもしてすぐに会いに行っていたはず。それでも、あの幼い日の別れは、俺と美玖の間に間違いなく壁がある。子供と大人の壁。あの日の散りし花びらの壁。それはあまりにも大きく、どこまでも遠く、果てしなく広い壁だ。

「そうなんだ……」

如月さんの声に、ただ、「うん」としか答えることが出来なかった。

「やっぱり、会いたい、よね？」

如月さんからの意外な言葉。何度も類似したやり取りから、俺の答えなど分かっていると思ったいたのに。

「会えるなら、ね」

そう答えるしかない。嘘をつくわけにはいかない。その気持ちだけは如月さんの前では偽れなかった。

―――拝啓　　海津匠様

春の訪れも落ち着き、いよいよ緑と暑さが深みを増す夏の訪れですが、元気でしょうか？

その手紙を書く時、私は間違いなく内心喜びと楽しみに満ちていた。どうすることもできなかった幼い日々から、やっと解放された気分。単純に嬉しさに私は喜び、返事の届かない彼を案じる手紙を引き出しの中から漁るように取り出した。時刻はもう深夜一時を過ぎていたのに、私は今の気分で書いておきたかった。

実は、匠君に一つ報告することが出来ました。

その文を書いた瞬間、私は数時間前のことを思い出して、頬が緩んだ。友達に変な美玖やね、とか絶対に馬鹿にされそうなくらいに。

「お父さんに相談してみなさい」

その一言で、お父さんが帰ってきてから夕食の時に早速聞いた。お父さんはお母さんと同じように理由を問いてきた。それでも私は同じことを伝えた。私は子供の殻から出て、大人になる。それは重たい責任と義務と社会性を背負うことになる。その実感は今は感じられない。だから心配されることは当然だと思う。だからこそ、心配されないように頑張ってきた。その私がやっと自分で決めるこれからの選択。昔匠君に言った記憶のある、人にある九十パーセントの選択。私はきっと努力も才能も運も、今は使ってない。その選択の先にあるものに、その十パーセントがやってくる。

「大阪じゃダメなのか？」

「ダメ。行きたいの。私の故郷だから」

大切な思い出の残る鹿児島だから、譲りたくなかった。我儘なのは子供。でもそれを選んだ私は大人。そう思うことこそお父さんたちにしてみれば子供なのかもしれない。でも、私はそれをもう選択した。だから後はその先にあるものを確かめることが、きっと私にある責任と義務だと思う。

「お願い。別に進学を決めたわけじゃないよ。オープンキャンパスだけでも良いの。行きたいの」

私の願いに困惑するお父さんとお母さん。強く願っても私の心はやっぱり恐怖と不安を感じていた。

最近にしては手紙を出す機会が多いですが、実は八月十日から一泊二日ですが、鹿児島に行くことになりました。私は一人で一日もいられませんが、久しぶりの鹿児島に行くことを伝えたくてお手紙を出しました。

書きたいこと。言いたいこと。それは手紙に書き記すことに、躊躇いが生まれた。理由は分らない。会えるのならば、私が伝えればきっと……。そんな淡い想いもある。でも同時にそれを大きく打ち消す思いが当然のように淡い夢を泡雪のように溶かしていく。私は子供ではなくなったから。

まだ日にちはありますが、正直今から楽しみにしていたりします。私が覚えてる鹿児島がどうなっているのか、その日になることを楽しみにしてます。

草々――――

これは神の悪戯なのか、悪魔の微笑なのか、俺は短期間で返事を出していない間に来た手紙に絶望に近いものすら感じた。相手は美玖。相変わらずの文面で書かれた報告に、目を下ろした瞬間の時間がしばらく継続して支配してきた。卓上カレンダーを一枚捲る。一昨日飛行機の予約も済ませ、支払いも済ませた。もし美玖がこの手紙を書くのが数日、いや数時間でも早く、全ての行動がそれに比例して行われていれば、俺はきっと今頃その時間に反比例して己の選択した全てを改めなおしただろう。選んだ選択肢が誤りであるわけでもないのに、それを誤りとして、正しい、俺にとってはそれが正しい選択として選びなおす答えを導く時間があった。

世界はあまりにも残酷で少ししか優しくない。八月のカレンダーに記された二日間をわたる横線。その線の始点は十日。終点は十一日。オープンキャンパスの日取り。朝一で大阪に渡り、午後からキャンパスを見学し、翌日帰鹿する。俺に許された時間。それなのに世界は残酷をもたらす。よりによって。その気持ちが後悔を激しくもたらす。

「何でこの日なんだよ」

もう取り戻せない。俺が少しでも自立し、稼ぎと言葉ではあまりに短絡で簡単な言葉であり、行動では肉体の長時間による労働の下に得られる決して楽ではない金というものを手にしているなら、航空券のキャンセル、ホテルの宿泊キャンセル。それに伴う料金の事を考えると、俺は大人にはなれない。世界はとてつもなく巨大で、俺はあまりにもちっぽけに過ぎないと痛感してしまう。

「何しに、帰ってくるつもりなんだ？」

焦りと後悔の気持ちはすぐに凪を取り戻す。代わりに新たな疑念が湧く。何故、八年もの間俺の知らない世界へ越し、お互いを知ることもなく、お互いに空白の八年という時がある。それが突然打ち破られた。そして交差した時間はほんの一瞬。交差した道は再び別離した道へと進む。大人であるなら、その道を引き返すという選択肢がある。だが、子供には、特に俺たちのようにはっきりと線引きされることのないあやふやな存在には、ダダを捏ねることにも気を使う。この道を通り過ぎた大人には、それこそいらぬものだと笑って過ごすが、そうもいかないのは思春期の特徴の一つなのかもしれない。

「何で、書かれてないんだよ」

予定は漠然。予定は未定。この手紙からはそんな世言は聞こえてこない。俺は知っているから。長年届く手紙の成長に、この文字を書き記した美玖は、確実に未定なことを主張しない。そう見せてもその裏には確信がある。俺は何度もそれを読み解こうとした。軋む背もたれに、頭部の影で薄暗くなる手紙。何故この手紙には鹿児島

と言う決して狭くない所へ行く、なのか。もう美玖にとって鹿児島は帰る場所じゃない。それは分っているつもりなのに、気持ちは受け入れようとしない。忘れたのか？　好きだった桜の木を。俺の背中を。そう手紙に書いて返すことが出来れば楽になれるのに、返事を書く前に届く手紙に萎縮してしまう。

「美玖、やっぱりそうなんだな……」

大人になることと、大人になったと思うことは違う。俺は後者が大人と思うことが多いが、この時においてそれ以上に恥ずかしいことはないだろう。俺は子供であり、美玖は大人。だからこそ具体的内容を記さない。そこに過去への羨望が含まれているかは分らない。嘘をつれたことがない以上、この文字は俺には全て真実であるとしか思えない。

「皮肉だ……」

それでも俺は子供だ。そこに込められた思いよりも、美玖がここに帰ってくるのかを気にして、もしかしたら家に来るかもしれないという思いと同時に、こういう伝え方をする美玖が仮に家に来た時、どこか出会うようなことが会った時、俺は美玖と話すことが出来るのか、そうなることを想像すると美玖とは手紙だけのやり取りで、もう顔を合わせることはしたくないと思う気持ちが勝ってしまった。

弦をめいっぱい引いた瞬間、胸と頬、腕、背中に強い力を感じる。つまり全身に負荷がかかる。三年前、初めて弓を手にした時は弦の張りの強さに引くことに恐怖を覚えた。何度も弾いた瞬間に痣になった。それが今はもう夢のように、恐怖を感じない。引きも筋力が付くにしたがって苦じゃなくなった。でも、今日の弦は重たい。弦を引く手にも弓を持つ手にも一定した力を維持することが出来ない。

「……っ！」

集中できず、弦の力に負けた。放たれた矢は十分な力を得られず、的に届くことなく砂に突き刺さった。全く集中できてない。自分に悔しいとはっきりと感じるのに、それを受け止められない迷いが的

へ矢を届かせない。こんな姿は後輩にはとてもじゃないけど見せられない。弓道場が裏口にあって良かった。朝でよかった。でも、だから恐いとも思った。

「あっ……」

その瞬間、隣接する更衣室へ駆け込んだ。放った矢を片付けないまま弓道場を後にすることは厳罰ものだって理解してたのに、あたしは扉の向こうへ外の世界から隔絶された孤独の部屋に逃げた。匠君が見えた。いつも感じるものとは違うドキドキに不快な汗が出てきた。夏の暑さにはないベタツキがタオルで拭っても消えなかった。

「どうして、隠れたんだろう……？」

裏口の駐車場を歩いていく砂利音が消えるのを待ってから、静かに戸を開ける。

「あ、いたんだ？」

「え？　あっ……」

あたしは失念してた。彼は優しい人だってことを。

「これ、如月さんのかな？」

匠君の手には、あたしが放った迷いの矢。

「う、うん。ごめんね。あたしが片付けないといけないのに」

慌ててた。誰も居ないから入っていい場所じゃない。まして匠君は部員じゃない。踏み入れていい場所じゃないことは三年も教え込まれた。だから私は慌てた。

「ほんとにごめんね。あたしが悪かったのっ」

「いや、誰も居ないのに矢が落ちてるのが見えたから、危ないと思って。こっちこそごめん。部員でもないのに。立ち入り禁止じゃなかったかな？」

哀しかった。嬉しかった。不甲斐ない自分が嫌だった。

「ううん。あたしの不注意だから。ありがとう、ごめんね」

受け取る矢は少しだけ温かくなってた。匠君がこの矢をどうするか考えていたんじゃないかと、あたしは彼の優しさにまた胸の高鳴りを押さえるのに必死だった。

「でも、珍しいね？　何かあった？」
「え？」
　その優しさは、きっと羽虫を惑わす暗闇の灯。日の当たる場所に咲く一輪の花なんかよりもすごくて、荒野に咲いた一輪の花のように、決して誰かの為にあるわけじゃないのに、自分のものだけで居て欲しいと思いながら近づくと、その眩しすぎる炎に近寄る羽虫を焼き落としてしまう。あたしはきっと、それでも良いと思って炎に飛び込もうとする羽虫。
「ううん。なんでもないよ。ただ、ちょっと集中力が持たなくて油断しちゃった」
「怪我はしなかった？」
　あたしは笑顔になれなかったのかな。自分では笑ったつもりなのに、匠君はあたしのことを心配してくれた。その優しさに怪我をしそうだった。
「うん、大丈夫」
「そう。良かった。あんまり無理しないほうが良いよ」
「……うん。これ、片付けたら終わりだから」
　だから、その優しすぎる言葉をこれ以上あたしにかけないで。あたしはもう受け止めきれないくらいに溢れそうな思いがこぼれそうになるから。
「分った。じゃあ、先に行くよ」
「うん。またね。ありがとう」
「こっちこそ、ごめん」
　匠君がそう言って校舎に歩いていく。良かった。ほっとした。それと、哀しくなった。胸が痛くなった。引張られるような、取り残されるような。今すぐその背中を引き止めたい衝動を、矢を胸に抱えて押さえ込ませるのに必死になってた。
「ごめんね……ごめんね」
　分からないよ。あなたの気持ちが。どうしてこんなに私に優しいの？　私はどうすれば良いの？　分からなくて、恐くて、ドキドキ

した胸が痛かった。彼がどこを見ているのか、今だけは顔を合わせたくなかった。

次回更新は7月15日辺りです。
正直この作品は個人的にはもうすぐ（あと三抄くらいで）終わらせるつもりなので、更新し続けたいと思っているんですが、他の作品に比べると閲覧数も少ないので、どうしようか模索中です。
最悪、どこかの文学章用に書き下ろしをしなおして、ここでの更新は打ち切るかもしれません。

他の作品と、べた恋参加の企画と、文学賞用の作品の執筆が詰まってるので、更新は目安とお考え下さい。

七抄．夏の休み（前書き）

予定より早い更新です。
この前はどこかで三抄ほどで終わらせるとか行ってましたが、ここに来て無理だな、と確信しましたので先に連絡しておきます。つまりは、まだまだ続きそう？

七抄・夏の休み

夏になると時間が遅くなる。日が夜八時を過ぎてようやく西の空が茜色に染まる。なのに、カレンダーは選択した日を迎えようとした。

「匠、準備は出来てるの？」

「大丈夫。一泊だけだし」

小さなキャリーケースには隙間があった。タオルを少し多きく畳んで詰めた。ドキドキしている。緊張している。けれど、それ以上に手紙を見る時間が長い。

今更もう戻れない。夏休みに入って、八月に入った。宿題とだらける日々ばかり。たまに木津と遊んだ。暑さでゲームセンターかどちらかの家でゲームか漫画を読むだけ。その日々が二週間ほど経った。

「じゃあ、気をつけていくのよ？」

「心配しすぎだって。子供じゃないんだから」

バスセンターまで送ってもらい、そこからは空港バスで空港に向かう。見送りに来た母さんは心配そうに言う。気を使ってそうは言うが、きっと母さんは俺と言う人間を誰よりも知っている。だから分かってしまうんだろう。どうしようもない。俺はこの人の息子だから。

「じゃあ、行くよ」

「お土産忘れないでよ」

言うだけは言う母さんに笑った。バスの中は数人だけだった。会社員らしい男に、若い女性が数人。空港までのひと時の仲間だった。久しぶりに見るバスからの光景。見慣れた景色が消えていく。これから向かう先に、一体何があるのか。俺には分からない。高揚感は不思議となかった。

「今頃、どうしてるんだろうな」

キャリーケースとは別に提げカバンの中から手紙を取り出す。車内で読むと酔う。昔から変わらない癖のようなもの。だからじっくりとは読まない。

――実は八月十日から一泊二日ですが、鹿児島に行くことになりました。

返事を書けばよかっただろうか？　緑の山間を走るバスの外は、燃えそうなほどに眩しい夏の日差しが貫いていた。

その日は俺、大阪に行く。そう俺が返事に書いていたなら美玖はどんな反応を示しただろう？　俺は考えなかったわけではないが、選ばなかったことをバスの窓に頭を寄せて、バスの旅に躊躇いを感じていた。

空港内は実に夏の旅行シーズンに賑わいを見せていた。鹿児島に降り立つ観光客が無料の空港の出入り口の傍にある足湯を満喫していたり、土産物品店の鮮やかな南国色に開放的な気分が漂っていた。電子掲示板には搭乗予定の航空機があった。出発時刻まで約四十分ほどあった。全日空大阪伊丹行き。午前十時定刻出発予定。手荷物を預け、二階の保安検査場へ行く。土産を見ることもなく、空港独特の高揚感を味わうこともなく、保安検査場を通過した。搭乗口五番。ロビーで自販機で買った珈琲を飲んでいると、大阪からの到着便が目の前の窓の外へ巨大な姿を寄せた。三分ほどして続々と大阪からの搭乗者が降りてくる。

「……」

分かるわけなかった。花柄のワンピースの可愛いと思える女の子もいれば、ジーンズ姿の子、スカートの子。家族連れ、サラリーマン、恋人同士、鹿児島じゃ見ないようなお洒落な女の子。美玖がいるとすれば……。そんな淡い期待を胸に降りてくる人の波を見ていても、誰が誰なのか分からない。

「……？」

ふいに、数人がこちらを振り返る姿を、意味もなく見てしまった。似たようなお土産袋を持つ人や、俺と同じように何も持たない子もいた。

———美玖、か？

出てくる人の波が途切れて、不意に最後に降りてきた女の子と目が合った気がした。そう思った瞬間には、その子は出口へと背中を向けた。目が合ったわけじゃなく、ただ物珍しさ空港を見ていただけのようで、内心で自嘲した。何を考えているのか、俺は。

暫く待った後、機内へ案内が始まって、乗り込んだ。もう引き返すことが出来ない。最後の選択も、俺は選ばないまま、流れに乗ってしまった。

夏休み。もうすっかり慣れてしまった梅田のビルの日向と陰の温暖差。吹きぬけるビル風も夏色に染まって朝からどんどん気温が上がってる。

「じゃあ、気をつけて行きなさいよ？」

「うん。どうせ移動ばかりだもん」

伊丹空港の全日空のビルディング。久しぶりに来た空港はまだ八時にもなってないのに、もう混雑してる。皆どこに行くのかな？夏の旅行シーズンに便乗するように、私の胸も高鳴っていた。

「ついたら連絡しなさいよ？」

「分かってる」

お母さんの心配そうな声に、不思議とおかしさに笑いが漏れた。私ってやっぱり子供なんだね。お父さんとお母さんにしてみれば、いつまでも子供なんだろうけど、私は一人でも大丈夫、だと思う。初めての一人旅だから、ちょっと不安はある。でも、これから行く場所は帰る場所。だから大丈夫。

「それじゃあ、行ってくるね」

エレベーターを上がるともう早速開店しているお土産屋さんには多くの人が行き来して、保安検査場も行列が出来ていた。こんな朝

早くからどこに行くんだろう。人の多さには慣れているけれど、混雑ぶりにはちょっと驚いた。

伊丹鹿児島線の始発便。午前八時十分発の機内は満員。隣には知らない男性と女性がいて、私は窓からもう住みなれた大阪の町の欠片を遠目に見た。これは帰る旅なのか、それとも新たに訪れる旅になるのか。ようやく叶う、長かった故郷への想いに緊張する高鳴りと、私が覚えているものがあるのだろうかという不安のドキドキが、離陸に座席に押し付けられる強さにさらに高鳴った。

空はどこまでも青くて、雲は真白で、少しだけ耳が痛かった。近づいてるんだ。見慣れた大阪を離れて、広がる空と海に今まで感じていたものが、水に溶けるみたいにスーと消えた。

機内アナウンスが着陸態勢に入ることを告げてから、私はすごく緊張してた。恐いとかじゃなくて、鹿児島なんだって。桜島が窓の外に見えた時、幼い記憶が少しずつ鮮明に瞼に映った。

機内から降り立つ。大阪に居る時はちょっと派手かなって思ってきていた花柄ワンピースもそんなに目立つこともなくて、鹿児島の暑さには逆にこれで良かったかもしれないと、折り返し伊丹空港行きの飛行機を待つ人たちの目も、缶コーヒーを片手に据わっている男の子や携帯を弄ってるおじさんの目くらいしかなかった。

（帰ってきたんだ……）

八年ぶりの鹿児島。オープンキャンパスが午後からだから、足早に空港を後にする。出入り口を出た途端に感じる、柔らかい熱気の壁にぶつかりながら、目的のバスに乗ってホテルと大学へ向かった。その近くには昔暮らしていた思い出の地があることを思い出しながら。

変わってない。変わってなかった。それがどうしても嬉しくて、誰かと今、この気持ちを分かち合いたいくらいに私は見るもの全てに感動と興奮を覚えた。鹿児島市内の様子は変わっていて、都会チックになってたけど、目的の場所は私が覚えているおぼろげな記憶を鮮明に掻き立てなおしてくれるくらいに、ほとんど変化がなかっ

た。すごく嬉しかった。もう帰る家も何もないのに、今すぐにでも帰りたいとキャリーケースを引く手がかすかに汗を帯びていた。ホテルについて荷物を部屋に残して大学に向かう。外は立っているだけで気分が悪くなりそうなくらいに強い日差しと夏の暑さに、木漏れ日を潜る涼しさが南国を醸し出していた。

「この後、行ってみよう、かな？」

答えてくれる人はいない。昔はいつでも私のことを見てくれた人がいた。今は大阪に一人だけじゃない、沢山の友達がいる。でも、私が考えていたことは大学のことを色々と教えてくれる人の話じゃなくて、幼少を過ごし、かけがえのない大切なものをいつも私に与えてくれたたった一人のことばかりだった。

夏休みに入ると、接点のない自分がもどかしく、つまらなく、何かを消失したショックに打ちひしがれてるみたいな、身の入らない気持ちが暑さに加速する。

「姉ちゃん、今日部活じゃねぇの？」

弟も夏休みに入った。ただでさえ何もしないだらけた弟が、より一層ダメになってた。家事はいないでいつも起床はお昼前。夜は遅くまで起きてるし、日も高いうちから自分の部屋にクーラーをつけてる。

「今日は休み。ってかあんたね、ぐうたらばっかりしないで手伝うとかしないわけ？　宿題もよ」

「えー、夏休みだぜ？　休みなんだしいーじゃん。別に宿題なんて後半からでも間に合うし」

間に合わないように、日ごろから取り組ませる為に宿題は多く出されてるってことに無自覚の弟に暑さも重なって、なんか腹が立つ。下の兄弟がいると良いよね、とか話題になる度に、あたしは否定する。こんなダメ弟がいるなら、一人っ子でいたほうがマシ。いつもそんなことを言ってる気がする。

「つーか、姉ちゃんこそ何かないわけ？」

「何よ？」
ごろ寝したまま見上げてくる。姉を姉と思わない態度には見慣れているけど、やっぱりこいつは……とか呆れちゃう。
「せっかくの夏だぜ？　夏祭りとか海とか好きな奴とか誘わないわけ？」
彼氏がいないことは知っている。だから好きな奴という。とっさに浮かぶ人が、いた。
「あ、いるんだ？」
「うるさいわね。あんたに言われたくない」
顔に出てたみたい。茶化されて急な恥ずかしさに弟を蹴った。
「それに、そう言うのって誘うものじゃないでしょ？」
誘われるものだと思うし。でも、夏休みに入ってから一度も顔を合わせてもいないし、声も聞いてない。
「誘われてねぇのに何言ってんだよ。このまま期待だけして結局何もない夏休みとかでいいの？」
その指摘は、胸に響く。期待してないわけじゃない。海津君との仲は未だに付き合ってると思われてたりする。海津君はそれを否定しないでいつも笑顔で受け流している。私は甘えてる。でも、実際は何もない。それがもどかしくて、汗でべたついた胴衣をいつも来ている不快感のようなものがあった。
「大体さ、今の世の中男より女のが強ぇんだって。男から誘えるわけないじゃん」
だから俺、待ってんの。漫画を広げながら言う弟にはため息しか出ないけど、言葉はそうなのかも、とか思うものもあった。
「どうせ休みなんだし、誘いにでも行けば？」
無責任な言葉。出来るわけがない。海津君の家は知らないわけじゃないけど、直接尋ねて、なんてとてもじゃないけど無理。
「それか手紙。顔合わせないし楽じゃん？」
「手紙？」
手紙、か。それなら……。

「って、何であんたにそんなこと言われないといけないのよっ」
「いてっ」
ニヤニヤしてあたしを見る弟の顔は羞恥を隠すために叩いてごまかした。部屋に戻ったら、すぐに机を漁った。手紙なんて書いたことなんかほとんどない。まして、男の子に宛ててなんて書いたことなんかない。それでも、弟に言われるがままにあたしは探した。
「……やっぱりダメ」
便箋はあった。昔ちょくちょくお遊びで持ってた便箋の残り。淡いピンクの桜柄。いざ書こうと思って、一文字も書くことが出来ないまま机に突っ伏す。近いうちに近所の夏祭りがある。とっくに海開きだってされてる。一緒に行ければ楽しいよね、なんてペンを転がす。でも、書けない。答えが分かっちゃったから。
「絶対に、断らないよね、海津君」
いない人を想うのは、複雑でちょっと辛い。その相手が海津君だとなおさら。まっさらな便箋には何度も瞼にしか映らない言葉が消えていく。集中出来ない。答えが分かっていることに、歓喜出来ない自分がいる。優しすぎる彼だから。彼は優しすぎるくらいに優しい。であった当初は意識なんかしてなかった。きっかけなんてほんの些細なこと。それがいつの間にか無意識に背中を捜して、言葉を待って、朝誰よりも早く登校して、不純な思いに弓を引いてた。でも結果はついてきた。不純でもちゃんと練習できたから。褒めてくれて笑ってくれることだけに、いつしか弓を引いてた。
でも、夏休み前のあの日から、その優しい笑顔が恐くなった。裏切らない彼だから、その優しさに思いを伝えることが出来なかった。
「あのこと、聞かなければ良かったの、かな……」
笑顔の中にあった、海津君が笑顔でいる理由。あたしの勝手な憶測だけど、あたしだって女の子。分かっちゃう自分が嫌だった。海津君は優しい。けど、それは誰かに対する好意じゃなかった。勝手な勘違いの交差の中にいるあたしは気づいた。海津君は近い笑顔の中に遠くの寂しさを見せてるんだって。

「書けないよぉ……」
もっと時間が浅ければ。もっと海津君との時間が短ければ。それかいっそ気づかない鈍感なあたしでいることが出来ていれば。気づいた思いを打ち消すには、時間が長すぎた。顔を埋める腕の中は、洗剤の夏の匂いが胸をもっと締め付けた。

七抄．夏の休み（後書き）

これからは連載が滞っていた作品も更新していこうと考えているので、更新頻度は落ちます。他作品がやく十作ほどあるので、早くて週二ペースで更新しますので、約三週間毎の更新とお考え下さい。あくまで余裕がある時の話ですが（＾＾；

八抄．その思いの先へ（前書き）

これまた予定日よりも早く更新です。

ようやく本作も中盤です。いやぁ、いつになったら終わるんだろう？　予定を大幅に超えてるなぁ（苦笑

それでも、これからは少しずつ時代の流れが速くなっていきます。

次回更新作などは後書きにあります。

八抄．その思いの先へ

なんと言うべきだろうか。とにかく圧巻と圧迫に、息が詰まりそうと言うのが、正直な反応。伊丹空港に降り立って、中心街へ向かうバス乗り場でバスを待つ。鹿児島空港とは比にならない広さと人の数に、眩暈すら覚えそうだった。その上、空港の外はモノレールが空中を走っている。思わずその車両に見入り、田舎と都会の差を目の当たりにした。こんな所に美玖がいる。探せそうもない。途方もない地域で八年の時を経た。分からないのも無理はない。淡い期待がラムネの泡のように弾けてしまった。

それでも都会の喧騒と新世界の遭遇には胸が高鳴る。見たこともない景色が、リムジンバスに乗り込むと移ろう。地理で学んだ淀川。ここまで大きな河川を見たことはなかった。それよりも驚いたことは多い。見たこともない巨大なビル群。梅田に入ると空が見えなくなった。俺の人生で空の無い世界なんて、ありえないことなのに、どこを見てもビル壁で、人が蠢き、圧迫感が少し苦しい。誰かを思うこととは違う胸の苦しさだった。

「すごいな……」

それだけしか思い浮かばない。映像で見る世界とこの目で見る世界はあまりにも広角に差が生じた。丸ビルというビル前で下車してから、駅に向かう。予め地図を用意していたとは言え、ここがどこなのか、方角がどこなのか、それすらも分からないほどの都会に、ため息が漏れた。

とにかく、向かう先はまずはホテル。荷物を置いて、どこかで昼食をとって、オープンキャンパスに行こう。何をしたら良いのか、判断がつかない中での最低限の行動に移ることにした。

「すみません。ここからここまでは、どう行けば良いですか？」

大学のオープンキャンパス。目的はそれだけだ。明日には地元に戻る。時間なんてないに等しい。ホテルの受付で道を聞き、日差し

と緑の少なさに熱が上昇する蒸し暑さに、駅を探して、テレビで見たような煩さなんてない電車の涼しさと、流れる景色に時間を潰した。

（俺の住む世界とは、ほんとに違うんだな……）

都会の中を走る電車の車窓から、不意に美玖の手紙が思い浮かんだ。あいつはいつも鹿児島にいるこちらのことを伺っていた。嫌なのか？　やはり手紙から感じれたように一人なのか？　この都会の中から逃げたいのだろうか？　そんなことばかりが浮かんでしまう。最も新しく届いた手紙に記されていた内容が、今日、美玖が鹿児島に居るというものだったのだ。気にならないわけがなかった。桜の写真を求めてきた美玖に、俺はまだ何も渡すことが出来ていない。少しでも時間が欲しい気分だった。

「俺は……どうなんだろうな……」

都会が嫌いになったわけではない。むしろ地元にはない利便の良さには、悩むことがなく、とんとん拍子に目的地に迎えている。まだよくわからないことばかりとは言え、悪いとは思わない。ただ、経験がない分、意識がついていけないだけだ。それでも美玖はもう八年もこの町で過ごしている。いくら引っ込み思案だった美玖でも、生活環境には慣れているはず。それでも、相変わらず手紙を届けてくる美玖は、一体俺に何を求めているのか？　それだけが、未だに分からない。持参した手紙にはきちんと住所が記されている。大阪府大東市。それがどこなのか、今の俺には皆目見当がつかない。正直な所、電車がどこを走っているのかすら分かっていないんだ。とにかく下車する駅の表示が出るまで、ドアの細い電光掲示板と景色を眺めることが、今の俺の精々だった。

もう、すっかり大阪の生活が身についてしまっているんだって、バスを待っていて思っちゃった。大阪ならバスはそんなに待つことがないのに、ホテルに荷物を置いて、オープンキャンバスの帰り、

少し寄り道をしようと思って待つバスは、なかなか来ない。時間は後十分くらいある。待ってる時間は二十分を越えてる。変則な時間にオープンキャンバスが終わったから、他にも私の知らない、多分地元の子たちがおしゃべりに熱中している。もしかしたら小学校の頃の知ってる子かなって、思う期待もあるけど、分かるはずがないってすぐに分かった。でも、ちょっとだけ思うこともある。私の友達よりも自然的。お洒落なんだけど、私の知る流行とは違って、少し田舎って思える格好。やっぱり鹿児島なんだって、私のふるさとの時間はゆっくりなんだって、きっと今の私の方がこの子たちの中では浮いている。それが恥ずかしくて、私はやっぱり帰ってきたんじゃないんだって、ちょっぴり痛感しちゃう。

仕方がないことだって分かってる。八年ぶりだもん。分からないよ、やっぱり。覚えている景色はそのままなのに、そこに居る人の流れは、私が知っている世界よりも随分と早く流れてる。それでも私が暮らす大阪には及んでない。おんなじ日本なのに、不思議な感覚があった。

「時間もあるし、ちょっとだけ、良いよね……？」

懐かしい旅の思い出。オープンキャンパスでは大学内の色々なサークルが勧誘のチラシをくれて、ちょっとした小物とか、よく分からない資料みたいなものももらって、バッグの中はちょっと重みを増してる。その中にある、一通の手紙。消印のない手紙。これを投函したらどうなるかな？　匠君、驚いてくれるかな？　そんなことを考えると、ちょっとだけ楽しくなる。それか、直接渡してみようかなとか考える。きっと気づいてくれるよね？　私も気づけるよね？　匠君、どんな風に成長したかな？　時が変わっても、私の思いはあんまり変わってないのかもしれない――――けれど、彼は？　そう思うと、躊躇いに吐息が漏れる。

バスがやってきて、整理券を取って窓際の一人座席に座る。流れる町並みに見覚えがあると、声は出なくても口が開いて、思い出が甦る。　近づく振動に八年前の映像が静かに私の心をくすぐってい

く。降り立ったのは、小さな神社の近くのバス停。さびに標識が霞んでる。私が覚えてるバス停はまだ綺麗だった。雨風に晒されて見えずらい時刻表も、記憶のものとは違っていた。それでも――――。

「懐かしい……」

昔遊んだ神社。喧騒はなくて、閑静な佇まいは、私の覚えている世界と繋がってた。友達が多くなかった私が、いつも匠君と遊んだ場所。二人で春には桜吹雪の中を駆け回って、夏は虫を探して、秋は落ち葉を集めてお手紙にして、冬には小さな雪ウサギを作った場所。ちゃんとあった。変わらない欠片で。

「ちゃんとあったんだね……」

ベンチの傍にある一本の大きな木。陽光が木漏れ日の海を石畳に漂わせて、小鳥のさえずりが蝉時雨に負けないように響いてる。私が見たかった木。大阪にだって沢山の桜がある。でも、ここまで雄大で鎮座している桜はないかな。幹周りも一人じゃ全然届かない太さ。

「ここで、ぐるぐる駆け回ってたんだよね……」

追いかける私を、匠君は逃げて、二人で桜の幹の周りを駆ける。それだけなのに、それだけが今の私の脳裏に焼きついていて、目の前の桜に、そんな私たちの姿が見えた。

「匠君、約束、覚えてないよね……」

私がお願いしたこと――――写真が欲しい。でも、結局届かなかった。哀しいってことはないけれど、私の手紙が届いているのか、それがちょっとだけ、不安。一方的に送っている私。もしかしたら嫌がられているのかもしれない。そう考えてしまうことはある。でも、便りがないのは元気な証拠だって、言ってたのは匠君。きっと届いてるよね？　――――引越しとかじゃ、ないよね？

いろんな不安があった。でも、今は不思議とそう言う気分が湧いてこない。そう――――ただ、懐かしいの。今思えるのはそれだけ。

「うん。これ、出しに行こう」

小さな決意が夏風に背中を押されるように、踏み出す。もし、私

の手紙を読んでくれているなら、きっと今日、私が鹿児島にいることは伝わってる。会って何かを伝えたい気分とは少しだけ違うの。ただ、会いたい。私のことをいつも見守ってくれた人だから。蝉時雨がエールみたいに神社の森の中から響いて、私は記憶を頼りに懐かしい、あの人の下へ歩き出す。

「……来ちゃった」

目の前のお家。何度か帰り道で覚えた海津君の家。表札にもそう、ある。弟に踊らされている気がしないでもないけど、変わらない噂と、尾がついていく噂。それを誰も否定しない。それは嬉しいような哀しいような。つまりは苦しい。手を握ることもなければ、肩を寄せることもなくて、思えば思うだけ痛みを増す彼の唇も、ない。

だから私は———ずるいことをする。考えれば考えるほど自分が醜くなる。でも、それでも、私は好きなんだって気持ちには嘘をつけない。きっと優しい人だから。泣きたくなるくらいに優しい人だから、伝えたい。受け止めて欲しい。そう思うと、自然と足は覚えている、忘れることなんてない道のりを辿って、そこへ着いた。

「……どうしよう」

ため息混じりの、怖気。

無理だと思っていたのに、私は来てしまった。考えることよりも幾らも簡単に。だけど、そのインターフォンを押す勇気だけは持てない。ここに居る。彼が居る。その壁を隔てた先に。なのにその壁は私には大きすぎて、叩くことすら出来そうにない。

《誘われてねぇのに何言ってんだよ。このまま期待だけして結局何もない夏休みとかでいいのかよ?》

こんな時に出てくるのが弟の言葉って言うのが嫌だけど、変わっていく中で、変わらない私たちの関係に、私はこれ以上耐えられそうにない。夏が終われば、もう受験の波の中。最後のチャンス。分かってる。分かってるけど———。

「……はぁ」
勇気が出ない。緊張してる。弓道の大会でも感じたことがないような胸の痛みと足のすくみ。力を抜いて、ただ的と向かい合うだけ。でも、その的は遠いから落ち着いていられる。でも、海津君は私が呼んだらすぐ目の前に居る。そんな状況で力なんて入らない。矢を打つ前に、弓から手が離れる。もどかしさも加わってきて、どうするべきなのか、どうしたいのか、力が入らなかった。
「少しだけ、休憩してからにしよう」
そう思って、一旦離れようとした。でも、すぐに足が止まった。
――――今、私がここから離れて、その間に匠君がどこかへ出かけたら？　そう思ったら、それ以上陽炎が立ち昇る場所を歩けなくなった。
私は今日を選んで、来た。私自身が選択してきたのに、ここでこの場を離れることは、逃げることになるんじゃ？　自ら選択したことから逃げる？　私には才能も努力も出来ない。きっと、ここに来たのだって努力じゃない。ううん。努力したからこそ来れた。きっと弟が何も言わなかったら来なかった。
「やっぱり、自分で選んでないよね、私……」
これも結局弟の背中押しあってのこと。やっぱり私が立つ場所は、ただ押されるだけなんだって、ちょっとだけ自嘲が浮かんだ。
「ダメだよね。最後は自分でしっかりしないと」
ここまで来て怖気づいていたら、海津君との距離は絶対に交わらない。周りが囃し立てるだけ囃し立てて、ただその流れに乗るだけ。誰も否定しない。だけど、誰も肯定もしない。私と海津君のことを勘違いした木津の言葉から広がったこと。私と海津君は傍にいても、ただ並行しているだけ。それが周りから交差しているように見えても、私はずっと海津君の後ろに居る。それが鮮明になってきた今、辛くなってくる。
「――――うん。行こう」
振り返る。遠くにぱっと女の子が見えた。綺麗な髪と可愛い服。

私よりもずっと女の子に見える。ううん、きっとそう。でも、私は私。海津君の玄関前に立ち直る。大きく大気を吸い込むと、身体の中に熱気が一気に体温を高める。日差しが少しずつ痛みを伴う中で、私は腕を伸ばそうとした。

「あら？　梓紗ちゃん？」

心臓が一気にどこかに飛んでいったかと思うくらいに、びっくりした。

「あっ、こ、こんにちはっ」

勢いよく頭を下げた。もうほとんど反射。何がどうなったとか、誰だっけ？　とか考える前に。

「はい、こんにちは。どうしたの。今日は？」

そこで初めてその人を直視する。海津君のお母さんだった。何度か顔を合わせているから、おばさんもすぐに気づいてくれた。でも、二の句が出てこない。私の想定外。

「あっ、え、えっと、あの……その……」

言いたいことを口にする。それは途方もない努力の賜物なんだって、おばさんを目の前に、ただ一言――海津君、いますか？　それが出てこない。

「あぁ、匠ね？　ごめんね、梓紗ちゃん」

「……え？」

でも、高鳴りと緊張が、おばさんの一言と、頬に当てている手に静けさを取り戻す。

「匠ね、明日まで大阪に行っているのよ。オープンキャンパスにね」

一瞬にして、全身が引き締まるような、圧迫されているような、小さくなった気がした。海津君が大阪にオープンキャンパス？　初耳だった。そんなこと、一言だって海津君との話題になかった。

「ごめんね。もしかして、何か用事だったかしら？　伝えておくわよ？」

「あ、い、いえっ。大したことじゃないですからっ。そ、それじゃあ、失礼しますっ」

高揚から衝撃に変わって、私は逃げ出すようにそこから走った。
おばさんの呼ぶ声が聞こえたけど、私には海津君のことだけで、もういっぱいいっぱいだった。
「っ！」
さっき見かけた女の子が、角を曲がるといた。今の顔を見られたくなくて、急いで走った。
———逃げる。今日、私が選んだたった一つの選択だった。

八抄．その思いの先へ（後書き）

拝読ありがとうございました。

本作は読者も少なく、正直更新していて自己満しかないような作品ですが、それでも、少ない読者様を見捨てることなく最後まで書きます。

今後の展開は、恐らく皆様の予想通りです（笑

答えは読んでもらえればな、と思います。

次の更新予定作は、「ｙｏｕｔｈ　ｗａｒｋｅｒｓ」の後編です。これはちょっと長くなるかもしれないので、予定日は１６日とさせてもらいます。恐らく１４日くらいに何だかんだで更新してるかもしれませんが、１６日には確実に更新させるようにします。

その後は、現在アルファポリスでファンタジー大賞が開催されていて、それにエントリーしている作品が三作ありますので、１０月までは、その三作品を集中的に更新して、１０月からは「波の間に間に」「ライブラリアン」などを更新していきます。恐らくその途中で、「ココクラ」を挟むかもしれません。それから、ほのぼの日常ファンタジーを新規連載するかもしれないので、お楽しみに下さい！

追記。

連載中でした「ｆｉｎｅ　ａｒｔ　ｃｌｕｂ」ですが、手違いにより削除してしまいました。

あの作品は、途中からバックアップをとっている作品で、ともみつの手元には、途中部からの作品しかなく、改めて掲載する場合、少々古い話なので覚えていないことが多いため、途中からの連載にして、人物表などを「ココクラ」のように書いていこうかと思っています。

読者様が比較的いらした作品を削除してしまい、ご覧頂いている皆様には疑問を与えてしまったことだと思いますが、もし、連載の再開をご希望する場合は、ともみつへメッセージでも評価からでも良いのでお知らせ下さいませ。連絡がない場合は、申し訳ありませんが、「ｆｉｎｅ　ａｒｔ　ｃｌｕｂ」の掲載は無しと言うことにさせて頂きたいと思います。

いつまでも待っても仕方が無いので、９月２０日までに連絡がない場合は以上の措置をとらせていただきます。再開の声が多ければ、多少内容は変更になると思いますが、覚えている範囲で最初から連載を改めて行うかもしれません。

九抄．遠い世界（前書き）

更新です。

もうそろそろ高校編を終わらせるつもりなので、ややはっきりと今後の展開が分かるような内容です。

まぁ、あと二抄くらいは続くかもしれませんね。

九抄・遠い世界

オープンキャンパス。大学に通う前の疑似体験。それを選び、やってきた。賑やかに宣伝をするサークル。講義室の見学や、研究施設の紹介など、目にする全てのもが新しく、驚きを伴っていた。しかし、同時に子供ではいられないのだと、大人の世界の扉が目の前で広がることに、ひどく心が痛んだ。

「君、絶対にウチにおいでな？　めっちゃ楽しいところやから」

そんな常套句をいくつ掛けられたことか、まるで覚えていない。先輩に当たる人たちとは、これで会うことはないかもしれないし、来年、また顔を合わせるかもしれない。それは俺が選ぶことで結果は変わる。

「九十％の選択、か」

不意にそんなことを思い出してしまう。きっともう、忘れているんだろう、美玖は。でも、俺は覚えている。才能と努力だけではどうにもならない現実を知ってしまったから。振り回される子供に、そんなものは意味がない。その後の運に賭けるしかないんだ。早く大人になりたい。そうすれば、努力でも才能でも、道は開く。

「百％選択なのかもしれない……」

どれほど才能があろうとも、どれほど努力をしようとも、どれほど運に恵まれていようとも、その全ては選択と言う範疇に収まってしまう。じゃあ、その選択すら迷い、答えを出せない俺はいったい何なんだ？

オープンキャンバスで分かったこと。それがそれだった。
一日と言うものは当然のごとく過ぎ去り、鹿児島では見たことのない人の波の中を掻き分け、いくつものアンケートを取るよう声を掛けられ、無視して歩いた。鹿児島よりも小さな場所に、無数に蠢く人。改めて、美玖と出会えることはあり得ないと痛感する。こんなことなら、美玖に手紙を書いて、家でじっとしている方が、鹿児島に戻っている美玖と出会う機会に恵まれたかもしれない。後悔することで覆る事象はない。陸橋を通過する電車の轟音に紛れて、叫んでみればこの気持ちもどこかへ吹っ切れただろうか。
———無理だろうな。
あくる日、大阪に別れを告げる。思い出はない。後悔はある。本来の目的を達成したと言うのに、空港へ向かうバスの車内から眺める大都会には、後ろ髪を引かれた。
空港に着き、飛行機に乗る。手順は何も変わらない。とりあえず、いくつかの土産袋を手に、見納めになるかもしれない光景に馳せる思いを探してしまった。

でも、不思議と落ち着いてしまう自分に気づいた。想像すれば簡単に予想出来ること。何を期待していたのか、そんな自分に対する嫌悪までいかない、残念な気持ちが少しだけ、胸を締め付けた。
「当たり前だよね……」
昔から優しくて、格好良かったんだもん。彼女くらいいて当然なんだよね。
「そっかぁ……」

哀しい気持ちよりも、少しだけホッとした気持ちがあった。一つの分からない、不安だったものが解消されたんだもん。

「匠君、大事にしてたんだよね……」

思い返す手紙の内容。きっと、私がそれを見たら勘違いしちゃうかもしれない。匠君は忘れっぽいんだとか、面倒臭がり屋さんなんだ――――なんて、そんなわけがない。

返事のない手紙が、ずっと匠君からの答えなんだって、私、気づけなかったな……。

「これ、もう渡せないよね……」

良かったかもしれない。もし、あのまま匠君のお家に行っていれば、彼女さんと鉢合わせしちゃったかもしれない。その時、私は再会の喜びの中で、何を考えられたか分からない。

だから、良かったんだよ。私が気づかなかっただけなんだもん。

「どうしようかな、これ」

今まで色々なことを聞いて、変わりがないかを聞いていた。でも、変わらないものはなかった。皆、歩いているんだよね。立ち止まってたのは、私なんだ。返事を期待して、ポストの確認を日課にしていた私は、ただ、そこから動こうとしていなかった。匠君がいつも助けてくれて、優しくしてくれて、一人にしない人だから、ずっと気に掛けていて欲しかった。

きっとまた戻れる日が来るから。そんな夢を信じていたから、こんな所まで来ちゃった。

「匠君……」

匠君はやっぱり匠君だったんだよね。新しく歩き始めて、新しい道を選んだんだね。

もう、終わりにしよう。匠君は大切な人が出来たから、返事を書かないようにしていたんだもん。これ以上は迷惑、だね。

「ばいばい、匠君」

出せない手紙。破ろうと手に持った瞬間、急に色々なことがその手紙の中から湧いてくるみたいに、思い出した。

「人は、一％の才能と、一％の努力。それから八％の運、だったよね……」

運がなかった。才能もない。努力も足りない。私が選んだ道の先には、もうあの日に戻れるものはないんだよね。

沢山遊んでくれて、いつも守ってくれて、どこまでも引張ってくれて、ありがとう、匠君。

「好き、だったよ……きっと」

初恋。きっとそう。いつからとかじゃなくて、気がついた時にはそうだったはず。だから、お別れをしなくちゃいけない。匠君はもう、私の手を引いてくれることはないから。私が匠君の手を引張ることは出来ないから。沢山の思い出をその手紙に込めて、私は少しだけ震える指先に力を込めた。

「はぁ……はぁ……っ！」

「え……？」

それは、一瞬の風の中にあった、長く、ゆっくりとした瞬間。その時だった。私の目の前を角から走ってきた女の子が、息を切らせて目の前を駆けた。気づいて顔を向けた時、その子は私に少しだけ驚いたみたいに歩幅を変えた。さっき見た時にはなかった少しだけ赤い顔。ショートカットの似合い女の子で、私でも可愛いなって思える人だった。

でも、目が合ったと思った瞬間、それは風の中に消えて、その子は走り去った。

「どうか、したのかな……？」

すごく焦っていたようにも見える。でも、誰かも分からない、きっと匠君の彼女。私が気にしても駄目なことだから、私はあの子の背中を追いかけるように、心の中で匠君にさよならを告げた。破ろうとした手紙をカバンに仕舞い込んで、誰もいないところで、もう一度、そっとお別れをすることにして。

「やっぱり、あそこかな……」

ショック、なんだと思った。ううん。ショックなんだよ、やっぱり。

冷静さを欠いた。弓道なら間違いなく得点はなし。私らしくない。

「違う。違う……」

私らしいわけじゃない。違う。これも違う。知らないだけなんだから。

「落ち着け、わたし……」

私らしいとか、そういうのじゃない。だって、海津君は言っていた。大阪に行くかもしれないと。だから、不自然じゃない。不自然なのは私。今の時期なんだから、当然のはず。でも、胸の中に宿るものは、消えてはくれない。ただ、一言だけが欲しかった。それだけなのに。

「浮かれて、何やってんだろ……馬鹿みたい」

走りつかれて、今気づいた。またあの神社に来てた。どうしてだろう？　誰もいないところに来たかったから、かもしれない。

「今頃、大阪にいるんだよね……」

どこにもいない。何も言ってくれなかった。どれだけ甘えていたのか、幾ら甘えれば良いのか、馬鹿だった。子供だった。一人で浮かれてた。そして、恥ずかしくて———哀しかった。皆が勘違いして、つられて勘違いして、でもそんな現実はなくて、皆が騙されてる中で、海津君だけは何も干渉を受けなくて、ただ一人、何も見失っていない。きっと、海津君だけはずっと、ずっと遠くの世界を——その世界だけを見ていたんだ。今いるこの場所じゃなくて、決

めていたその場所だけをずっと。
「分かってた、はずだけど、でも……」
もう少しだけ、もう少しだけで良いから、こっちも見て欲しい気持ちが強くなって、また哀しくなってきた。
「あれ？　梓紗？」
背中から聞こえた声に、体が少しだけ引き締められるような驚きがあった。
「木、津……？」
振り返った時、自転車に跨った木津がいた。

九抄．遠い世界（後書き）

閲覧ありがとうございました。

次回更新予定作品は、前もって連絡していた通り、１１月１日にユースウォーカーズです。

さらに今後は、アルファポリスにて青春大賞が開催されるにあたって、ユースウォーカーズと明日のキミへを登録しているので、その二つを主に更新していくつもりですので、１１月中はそうなることをご了承下さい。

もしかしたら、本作もエントリーするかもしれませんので、その時はどうぞよろしくお願いします。

十抄．置別（前書き）

今回は仕事で余裕がなく、少しの更新です。

十抄・置別

「何してんだ？　こんな所で」
タイミング悪い。海津君とは全然察しが違う。早くどっか行け。心の中でそう思って、背中を向けた。今は、誰かと話したい気分じゃなかったから。
「おい、シカトかよ？　どうしたんだよ？」
背中で自転車を止める音が聞こえた。
「来ないで」
「は？　何で？」
何も知らない足音が、砂利を転がしてくる。来ないでって言ってるのに。
「おい、梓紗？　何だよ？　あっ、もしかして匠とデートでもして感傷に浸ってんのかよ？」
その瞬間、全身を何かが通り抜ける。激震とは言わないけど、急に背中を押されたみたいに、心が強く痛んだ。そのおかしそうで楽しそうで、茶化す言葉が、すごく胸に響いた。
「うるさいっ！　来ないでって言ってるでしょっ……あ」
思わずだった。気持ちが勝手にイライラして、声が出た。
葉桜が賢明に枝についている———まるで縋るみたいに。でも、目の前でくっついていた葉っぱが、風に飛んでいった。
「お前、泣いてんのか……？」
「えっ？　ち、ちがっ」
言われて手を当てると、指先が濡れてた。自分でも気づかなかった。慌てて顔を背けて涙を拭う。私、泣いてたんだ。匠君に会えなかっただけなのに。哀しい気持ち半分に、自分に驚いていた。そうしたら、また思い出してきた。また、泣きそうに気持ちが高ぶった。

「おい、マジでどうした？　どっか悪いのか？」
「うるさいっ！　関係ないんだから、ほっておいてよっ」
鼻を啜ると、その分が涙に変わる。見て欲しい。もっと気づいて欲しい。どんなに遠くを見ていても良いから。それでも、私はここにいるって。その為に今日は頑張った。色々と元気付けてくれて、励ましてくれた人に、気持ちを伝えようって。でも、海津君はやっぱり遠くしか見ていなくて、何も話してくれなかった。分かってる。頭ではそんなこと分かってる。
でも、だからこそ心がついていかない。
「いや、でもよ……」
「いいからっ」
しつこい。私がいいって言ってるんだから、どっか行ってよっ。そう言いたい気持ちが強くなるけど、言葉に出来なかった。
「梓紗」
肩に力がかかった。反抗しようとしたら、もっと強い力で撥ね退けられる。体が反転した。
「お前、匠と何かあったのか？」
目の前に木津がいた。私の肩を掴んで、じっと見られる。俯くけど、言葉だけは背けられなかった。
「な、何にもない。関係ないんだから、ほっておいてよ」
何もなかった。きっと初めからずっと。だから胸が痛いの。落ちた葉っぱはもう、元には戻れないんだから。
「そんな顔して言っても意味ねぇんだよ。話せよ。幼馴染だろ？」
だから何よ。関係ないじゃない。これは私だけの問題なんだから。
「おい、梓紗っ」

「うるさいっ！　馬鹿っ！　触らないでよっ」
堪えきれない気持ちに、強く体を揺らして木津から離れた。話したくない。惨めで格好悪い。それから、話したら絶対に泣く。そんな姿、木津に見られたくなかった。
「お前、喧嘩でもしたのか？」
なのに、木津は話しかけてくる。
「……もしかして、お前……」
「言わないでっ」
とっさに、木津の声色にそう言っていた。分かってることを聞きたくなんてない。耳を塞いで叫んででも聞きたくなんてない。認めたら、全部なかったことになるから。全部消えちゃう。そんな哀しいことだけは、考えたくない。ただそれだけが、今日の私にある結果。
木津の気配だけが背中にして、蝉の鳴き声が、泣き声に聞こえた。木津に怒っても仕方がないことは分かってる。小さい頃から知ってるだけだから、そんな八つ当たりなんて恥ずかしい真似いている自分が、すごく情けなかったことも分かってる。でも、知ってるから、私に入ってこようとすることが、恥ずかしくて嫌だった。
「……何が、あったんだよ？」
木津の声が、少しだけ恐くなった。
「何もないって言ってるでしょ」
「おい、梓紗っ」
「何でもないったらっ」
私をこれ以上惨めにさせないで。そう強く言葉にした。
「んな顔してっと、気になんだよっ」
「何でよっ！　関係ないでしょっ」

関係ない。
「あっ……」
その時、はっとした。関係ない。その言葉に、全身が強張った。関係ない。何も、関係なかったの？　その疑問が、鳥肌のような不快なものを帯びさせた。
「関係なくねぇよっ！　俺はなっ……俺は、お前が前から……」
「言わないでっ」
でも、木津の言葉がすぐに聞こえて、さっきよりも泣きそうになった。その続きは聞きたくない。聞いたら、もう全部がどうかなりそうで、言葉で塞ぐ。
「こんな時にそんなこと言うなんて、最低っ」
「あっ、おいっ、梓紗っ」
気づいた時には、逃げ出していた。こんな時にあんなこと言われたら、絶対にダメになる。
違うんだから。私はそんなこと思ってない。最後に見た木津の顔と言葉が胸の中で渦を巻いて、逃げ出す足が震えてた。

少しだけ、心臓がドキドキ言ってる。
「どうして、こんなことしてるのかな、私……」
背中を砂利を踏み走る音が遠くなっていく。どう言う事なのか、分からない。何があったのかも良く聞こえなかった。ただ、女の子が泣いて走っていた。さっき見かけた、匠君の彼女が。そして、私は何をしてるんだろう？　境内の木に隠れている。
「もう、良いのかな？」
そっと顔を出してみると、女の子はもういなくて、男の子が自転車に跨ってた。たぶん、もう大丈夫。そう思って、そっと木陰から離れる。
「何なんだよ、あいつ……」

じゃりじゃりって自転車を漕ぎながら男の子とすれ違った。一瞬私を見ていたけど、すぐに通り過ぎていった。複雑な表情で何かを呟いていたけど、見ちゃダメだったかも。今更後悔しても、きっともう会うことも、見ることもないから大丈夫って思って、歩く。気にならないわけじゃない。匠君の彼女さんのことは気になる。でも、私には出来ることなんてない。

もう、私はそんな繋がりを持っていないから。

「色々なことあるのかな？」

見上げる葉桜。ずっと昔の私たちにとって大きすぎる命で、今も大きい。ただそこにいて、きっと私の今もただじっと見ている。

「あなたは、どう思っているのかな？」

何も帰っては来ないし、それがあることも期待はしていない。ただ、たくさんの事を見てきて、どう思っているのか、少しだけ興味があったり。

「あのね、きっと、これが最後だと思うの」

カバンから手紙を取り出す。きっと、もうこの木の下で戯れることも、思いを馳せることも、満開の下を見上げることもないと思う。だから、これは最後の思い。

「ごめんね。あなたに押し付けちゃって」

きっと全部を見てきた桜だから、結末も一つ、ここに残しても良いよね？　もう、持って帰るなんて出来ないから。

「もう少しだけ時間をもらうけど、良いよね？」

そっと幹の根の部分に手紙を置く。ここに残していけば、もうきっと大丈夫だと思うから。

「それから一つ、お願いしても良いかな？」

そっと触れる桜の木は、硬くて真面目そうに佇んでいるのがよく分かる。小さい頃は傷とつけたり、枝を持って帰ったり、悪いことをしたのに、それでもここでずっと見守っている。

だから、話せるのかもしれない。もうこれ以上迷惑を掛けたりしないから、その誓いに一つだけお願いを添えても良いよね？

「ありがとうって、伝えて欲しいな」

言葉じゃなくて良い。それだけは純粋な思いだから、伝わる形があれば、そうなってくれれば良い。

「それじゃあ、行きます」

一礼して、もう一度だけ見上げる。雄大で静かに、これからもここにあり続けてくれることと、これまでの感謝を込めて、この地とお別れをした。

十抄．置別（後書き）

１５日に更新予定のフルキャストイーブンも、恐らく仕事の為、量は少量です。
１８日にはユースウォーカーズを予定しています。

十一抄．流去の道（前書き）

予定通りの更新です。

今回で高校生活がほぼ終わりです。次回に少し展開を消化して時代を進めます。

十一抄．流去の道

離れていく。思い出も、想いも。強い思いに引かれているのか、離陸した飛行機の中で、全身がこの地に残りたいと訴えるように、圧迫させる痛みも、すぐに空の向こうへと飛んでいく。

窓の外に広がる海の穹。どこまでも澄んでいて、雲が島のように漂う二色の世界。耳に響くエンジン音がその世界から音を掻き消し、この世界で人間しか到達出来ない世界で、俺は世界の全てを見下ろす。

「お客様、お飲み物はいかがいたしますか？」

そうカートを押しながら狭い通路を歩くフライトアテンダント。笑顔が絶えない姿が、眩しい。

「いえ、いいです」

何かを欲する気分ではなく、ただ、呆然とその世界を見つめる。

「……いい天気だ」

どんな日常に雨が降っていようと、この世界まで雲はやってこない。晴れることしかない世界。美玖の求める桜も、この世界ならきっと枯れないんじゃないのか。地上に幾ら時が経とうとも、ここは変わらないように思う。あの頃、何も知らなかった遠い世界が、今はいかに遠く、自分ひとりではどうしようもないくらいに何も出来ず、巡り会うことすらままならないのだと、世界が水溜りに写るだけではすまないのだと、痛感する。

「あっ……」

そのとき、視界に俺にとっては異色とも思えるものが移りこんだ。

俺がこれから向かう先――――帰る場所から飛んでいく別の飛行機。それは小さいものとして映りこむが、入れ違いに大阪の方へと飛んでいった。初めて目にする、飛んでいる飛行機と肩を並べて入れ違う光景。驚きと興奮を覚えた。今までの悩みを、一瞬だけ忘れてしまうくらいに。

誰があの飛行機に乗り、どこへ向かうのか。興奮も首を曲げて見えなくなった後の空に、消えていく。

今日、美玖は大阪に帰る。もしかしたら、あの飛行機のどこかの座席に、座っているのだろうか。そんな確かめようのない妄想だけが、静かにあっという間に消えていく飛行機を追う目が、俺を捉えて離さなかった。

「間もなく着陸態勢に入ります――――」

一定だったエンジン音が、勢いを弱め、見下ろしていた雲へと降りていく。一面の絨毯だった雲の世界も、それが雲だったのだと、平面世界が立体を成し、空の境界を潜っていく。機体が揺れ、平気なのだとアナウンスが答えても、慣れない自分にとっては無事に帰ることが出来るようにと、祈るものなど考えたこともないのに、何かに祈るように白い空間を見つめた。

耳を一度大きく劈くようにエンジン音が変わる。それが速度を落としているのか加速しているのかは分からない。それでも一面の白を誇っていた世界は、次第に途切れ途切れになり、揺れが断続的から継続的に不安を煽る。誰一人として平然とした表情を浮かべている。だからそう努めた。もうすぐ帰り着くのだと気持ちに嘘をついて。

やがて、世界から白が奪われていく。二重の窓を叩きつけていた白い小さな雨粒の塊が雫になった。鹿児島は雨だった。青の穹に始まり、白の境界に阻まれた、一日ぶりの鹿児島は灰色の空の下で、地上の緑が色濃く近づいていた。

自分がいた天高い空が、いつしか狭く見えてくるほどに、地上の世界が大きく広がっている。

「疲れたな……」
見覚えのある地上の光景が懐かしく、少しだけ興奮もした。一日前まで居たはずの故郷が、高度が低くなるに連れて、新鮮に見える。地上に手が届くほどになった時、轟音と共に激しく期待が振動した。ポン、ポン、ポン、と機械音が単調に響き、ブレーキの為のエンジンの逆噴射の音があらゆる音声を掻き消し、静かに振動も消えていく。
「お客様へご連絡いたします。当機はただいま鹿児島空港に着陸しました。機体が完全に停止するまで……」
停止するまでベルトを外さないようにとアナウンスが入っているにも拘らず、あちこちからベルトを外す音がした。俺も安定したタキシングにベルトを外して、息を吐いた。座席の臭いと様々な人の匂いが混じって、胸の中で、何ががムズムズとしたものを覚えさせた。
「ご利用ありがとうございました」
最後まで笑顔だったフライトアテンダントに見送られて降り立つ鹿児島空港。冷房が、少々狭かった空間の圧迫感を払拭する心地良さをもたらした。俺の長いようで短い旅が終わった時、視界に入る人間の全てが、誰かも分からず、思わず登場口を抜けた所で立ち止まってしまった。
「バスのチケット、買わないとな」
手土産とバッグを持ち直して、降りてきた人の中を同じように歩く。誰もが同じ道を辿り、やがては別れ、離れていく。俺の目の前に居る人は、これからどこへ向かうのだろう。そう思うのと同時に、その人は俺がどこへ行くのかを気にしたりするのだろうかと、下らないことを思い浮かべ、少しぼぉっとしていた。
「あっ」
「きゃっ」
それもその衝動に目を覚まさせられる。背中に感じた衝動。
「す、すみません」

とっさにそう振り返る。同年代くらいだろうか。髪の長い女の子がお土産袋を零し、小さな小箱がいくつか零れた。
「い、いえ。私の方も余所見してて……すみません」
その子は携帯を開いていた。恐らく、それを見ながら歩いていたから、気づかなかった。それでも、荷物を置いて、拾うのを手伝った。周囲を歩く人の目が一瞬、こちらを見て行くが、誰も関することなく視線を戻して歩いていく。そんなものなんだろうな。気にすることをやめて、足元に落ちた箱を拾った。
「これで全部？」
「あ、えっと……はい。大丈夫です」
袋の中を見て、数を数えた女の子が顔を上げた。それがはじめてお互いにまともに顔を見た瞬間だと、ふと気づいた。
「中身は大丈夫？」
お菓子か何かだろう。クッキーとかなら大変なことになったんじゃないだろうかと、申し訳ない気持ちがそう尋ねさせた。
「大丈夫だと思います。かすたどんなので」
そう少し恥ずかしそうに笑う顔が、少しだけ懐かしいように見えた。似ている面影なんてないのに、なにを俺は考えているんだと、多分同じような顔で笑った。
「かすたどんか。これから出発ですか？」
「え、あ、はい。出発と言うか、帰省で大阪に」
そう答える彼女は、これから三十分ほどしたら再び大阪へと戻る、俺がここまで来た飛行機に乗ることになるのだろう。随分と早く保安検査場を抜けたみたいだ。
「大阪ですか。凄い所ですよね」
「そうですね。あ、もしかして、大阪に？」
「はい。一泊でオープンキャンパスに行っていたんです」
何も知らない赤の他人だから、気兼ねなくそう言っている自分がいた。周りなど皆が互いに無関係に時間をすごしている。俺たちもきっとそう見られ、実際にそうなんだ。

「奇遇ですね。実は私もそうだったんです」
ドキッとした。その少しだけ嬉しそうなのか、面白そうなのか、分からないけれど、その笑い顔が似ていると思った。覚えているあの頃の幼い笑顔に。
「大阪からこっちに？」
「はい。昔、鹿児島にいたことがあって、昔の友達に会えるかなって思って」
少しだけ笑顔が小さくなった。それはそれが叶わなかったのだと、理解するには十分だった。
「でも、やっぱり分からないですね。もう十年近いことだと」
「だと思いますよ。離れてしまうと、もう分からなくなりますから」
ですよね……と、小さく呟く彼女に、俺は答える言葉を持てなかった。自分の言葉があまりにも自然に出てきて、言った後に気づいてしまう愚かな自分が過去に縛られている証だった。
《大阪国際空港発、鹿児島空港行きにご登場のお客様へご連絡いたします……》
そこで耳に入るアナウンス。預けの荷物が流れてくる。カバンを一つ預けたから、取りに行かないといけない。そう思って、会話を終えることにした。
「それじゃあ、そろそろ」
「あ、はい。すみませんでした」
「いや、こっちこそごめん」
空気を読める子だった。アナウンスと俺の言葉に理解してくれたようで、何度もすみませんと言われ、同じように俺も謝った。数回同じ事を繰り返して顔を上げると、思わず笑ってしまった。それを見た彼女も笑った。
「じゃあ、気をつけて」
「はい。ありがとうございました」
そして荷物を抱えなおし、歩く。何度か振り返ると、彼女はまだこちらを見ていて、笑っていた。それに応えれば良いものを、俺は

もうほとんど同じ飛行機から降りた乗客がいなくなり、荷物の受け取りにも急がないと、とそんな簡単な気持ちで、彼女から離れた。名前くらい、聞くことが出来ればよかったのだろうか。そんなことに気づいたのは、荷物を受け取り、バスのチケットを買って、バスの到着を待つ間に過ぎていく車列を見ていた時だった。

「似てた、よな」

何となく、そんな勝手なイメージを抱いてしまうくらいに、彼女の笑顔は似ていたような気がした。でも違うということはすぐに分かった。あの頃の美玖なら、あれほど社交的に、初対面の人間と話すことなんて出来なかった。いつも後ろについてきて、その流れで親しい友人を作っていた。だから、似ていてもあの子は違う。手紙の中で一人きりのように描かれた世界とは異なるんだろう。

「俺も、同じだな……」

女子とまともに話したのは、如月さんを除いて久しいことだ。いきなりのことであれほど普通にしている自分自身に、今になって驚いた。もう会う機会もないだろう。彼女は大阪へ帰る。俺は鹿児島に残る。俺の一生で、あの子と出会うことも、会話をすることも二度とないだろう。お互いにたまたまの不注意でちょっと会話をしただけの間柄。数日経てば忘れてしまう。出会いにならない出会いとして、思い出の中から消えていく。そんな気が、視界を多い尽くすように鹿児島の名産品を宣伝するようにデザインされた空港バスが入ってきて見えなくなる向こう側に思った。

流れるバスは、高速道路を走った。市内を抜けて、見える風景は壁とその上の少しの緑と、空。それだけでも鹿児島の夏なんだって、揺れる窓の上から吹きつける冷房の風が、熱くなっている窓の熱を静かに冷ましていく。四十人は乗れるバスの中は、半分も埋まっていない。私は運転手さんのすぐ後ろの座席で、隣にお土産袋と旅をする。着替えとオープンキャンバスで受け取った資料とお土産だけが、私の鹿児島にいる全てのもの。少しだけ軽くなったけど、気持

ちは夏の遥かな空よりもずっと下にある。
「彼女……」
当然だと思った。自分が恥ずかしいくらいに何も気づけなかった。鈍いなぁ、私。コツン、と窓ガラスに頭を寄せる。振動が全身に響いていく。ここに来て、こういう事態になるなら大人しくお父さんたちの話を聞いていれば良かったのかもしれない。なんて事も考えるけど、それはもう、私が選択したこと。その結果がどうであれ、これは私の選んだ先の答え。受け入れるしかない。それなのに、気持ちはすぐにはついてこなかった。
「はぁ……」
悲しいと言うものとは少し違う。悔しいと言う気持ちもない。でも、私の心は気だるさのように何か、心の中に空白が生まれていた。
「寂しい、んだよね、きっと」
理想と現実は運と選択。才能も努力も必要ない。でも、才能があれば幾度だって戻れることが出来たかもしれない。努力をすれば自力で戻ることもできた。でも、私はそのどちらも選ばなかった。だから、これは運と選択の辿り着いた先のこと。何も気がつかずにいられたなら、私はきっと変わらなかった。この流れる夏の空にだって、南国なんだぁ、とちょっと浮かれたままでいられた。でも、それはいつか来る日に、大きな傷を受けることになる。そう考えると今でよかったのかもしれない。
けど、やっぱり……。
「タイミング悪いなぁ、私って」
いつだってそう。転校から今日まで。運が悪いのかな、私。考えたくないけど、その可能性の高さは自分では否定出来ない。約束なんだって思っていたのに、その約束に私は何を縋ろうとしていたんだろう。
「どうなっちゃうかな、あの手紙」
あの時はあんなことしたけど、少しずつ時間が経つと恥ずかしくなってくる。誰かが読んでないかな。匠君が読んでくれたら良いけ

ど、他の人が読むのはヤダ。
「……持って帰ればよかったかも……」
木の根元に置いただけの手紙。絶対に誰かが拾うと思う。それが匠君なら少しは安心だけど、その可能性はないと思う。きっと神社の人が見つけて、読んじゃうかも。ゴミと思って処分してくれたら良いんだけど、捨てられたくない。そんな気持ちが流れて良く鹿児島の空に考える。
あの日も確か、こんな青空だったよね。匠君は学校に行っていて、私は行かなかった。引越しをするから。クラスが違ったから、ちゃんとお別れをすることも出来なくて、気がついたらいつもの家の中が空っぽになって、お父さんが車に荷物を積んでいた。
すれ違ってるわけじゃない、んだと思う。でも、いつも都合が合わない。自分の意思だけで何もかもを自由に出来る立場じゃないから。鹿児島から引っ越す時は、まだ小学生。お父さんとお母さんの言うことについていくことしかできなくて、結局ちゃんとお別れを最後に言えないまま、車に乗り込んだ。行きたくない。行きたくない。そう何回も言ったけど、通用はしなかった。お仕事だから。それだけの理由で私は匠君と引き離された。でも、それだけの理由だけが、大人の世界では通用する。当時の私には、才能も努力も運も選択も、何も出来ないだけだった。
「どうして、私、あんなこと言ったんだろう……」
その立場は今も変わっていない。親が言うことに逆らえるだけの責任も成長もしていない。でも、あの頃の私は、匠君にそんなことを言っていた。匠君はきっと忘れてしまっているだろうけど、私はずっと忘れていない。
だから、この選択に突きつけられる答えが、まだ少しだけ気持ちを静めていた。
《皆様、大変長らくお待たせいたしました。間もなく鹿児島空港です……》
そんなアナウンスが聞こえてくると、胸の中で何かがざわつくよ

うな、むず痒さにも似た落ち着かない緊張感が沸いてきた。お金を準備して、荷物を確認する。もうすぐ大阪に帰るのに、私の心はここに残りたいと思わせてくるように、痛みのない痛みを強くして、そっと手のひらで押さえ込むように胸を押さえた。

鹿児島空港は伊丹空港に比べると静か。都会との差だから当然だとしても、私にはまだここの方が少し楽な気持ちになれた。荷物を預けて、検査場を通る。その前に少しだけお土産を選んだ。昔から好きだったかすたどんをいくつか買った。柔らかくて、カスタードクリームが中に入っていて、きっと友達も喜んでくれると思う。紙袋に入れてもらって、検査場を通過して、登場口に歩く。

「連絡しておいた方が良いかな」

家にもうすぐ帰ると連絡しておこ。携帯電話を取り出して、メールで送る。返信は早かった。

《美味しいもの買ってきて》

お母さんからの返信は、気をつけて帰ってきなさい。というものと、それだった。私には娘の身を案じるよりもお土産に期待しているようにしか見えなくて、そのことを返信した。

「もぉ。美味しいものって何？」

お菓子かおかずか。お菓子は色々買ったけど、お母さんが言う時は、お父さんの好みとかもあるから、返信を待った。でも待つ間もなく帰ってきた。

「黒豚って……何だろ？」

返信にあったものは、おつまみになりそうで、美味しそうなもの。黒豚は忘れないで。と書かれていた。近くの売店を見ながらメールで写真を撮った。こういうのが良いの？　とかメールで聞いた方が失敗がなさそうだったから。

「あっ」

「きゃっ」

そう思ってメールをしていたら、ドンっと、ぶつかった。急なことにびっくりしてお土産袋を落とした。

「す、すみません」
そして、それが人だったと、やっと気づく。私が悪いのに、目の前の人は自分から謝ってきてくれて、慌てて私も頭を下げた。申し訳ないという気持ちと、恥ずかしさが一気に私に襲い掛かってきた。
「い、いえ。私の方も余所見してて……すみません」
今日は気持ちが晴れやかじゃなかったせいか、まともに顔を見ることも出来なくて、しゃがみこんで袋からこぼれたお土産を集める。でも、私に責任があるのに、ぶつかった人はわざわざ自分の荷物を置いて拾うのを手伝ってくれた。男の人にこういうことをされるのは初めてで、余計に緊張した。
「これで全部？」
最後に小箱を渡されて、中身を確認する。ちゃんと全部あって、きちんとお礼を言わないと。そう思って顔を上げた。
「あ、えっと……はい。大丈夫です。すみません。ありがとうございます」
てっきり凄く年上の人かと思ったら、私と同年代の人みたいで、少しだけほっとした。
「中身は大丈夫？」
そこまで気にしてくれるなんて、意外だった。凄くいい人なのかも。そんな印象を持てるくらいに、格好良くて優しい目をしてる人だった。
「大丈夫だと思います。かすたどんなので」
「かすたどんか。これから出発なんだ？」
「え、あ、はい。出発と言うか、帰省で大阪に」
「大阪なんだ。凄い所だよね」
「そうですね。あ、もしかして、大阪に？」
よく見れば、この人の持っているお土産袋には、見慣れたお店と京土産の文字が入っていた。この人は私が乗る予定の飛行機で鹿児島に来たみたい。帰ってきたのかもしれないけど。
「一泊でオープンキャンパスに行っていたんだ」

その言葉に、私の緊張が一気に解けたと思う。同い年なんだってだけなのに、男の子とこんなに普通に話したことは、大阪に居てもほとんどなかったから、少し新鮮な気持ちがあった。そして同時に、少し懐かしいような感覚もあった。それだけ私が男の子との接し方に慣れてないから、匠君とのこと以来かもしれない、何てこともふと頭を過ぎった。

「そうなんですか？　実は私もそうだったんです」

「大阪からこっちに？」

意外そうに見られる。多分そう思われても仕方がないと思う。大阪なら、鹿児島にないものが溢れている。わざわざ鹿児島まで来るなんて普通は考えないことだもん。友達に話した時も、不思議そうに聞かれたくらいだし。

「昔、鹿児島にいたことがあって、昔の友達に会えるかなって思って」

結局会えず仕舞いで、逆に落ち込む結果だったけど。

「でも、やっぱり分からないですね。もう十年近いことだと」

「だと思う。離れてしまうと、もう分からなくなるから」

笑われるかなって思ったけど、この人は違った。優しそうな瞳が、その一言に少しだけ陰りを見せたように見えた。私とは違うと思うけど、少しだけ親近感が沸いて、もしかしたら匠君もこういう人みたいになっているのかなぁ、とか、好きになるならこういう人が優しくて良いのかもしれない、なんて思ったけど、この人と私は目的地が正反対。ここまでのお付き合いで終わる、ただの他人でしかない。少しそう思うとどうしてか寂しさがあった。

《大阪国際空港発、鹿児島空港行きにご登場のお客様へご連絡いたします……》

アナウンスが入ると、男の子が忘れていたように私を見た。さっきの瞳の色はもう無くて、これで終わりなんだって私も気づいた。

「それじゃあ、そろそろ」

「あ、はい。すみませんでした」

「いや、こっちこそごめん」
そんなお互いに謝ることが二回くらい続いて、顔を上げて目が会った時、おかしくて笑った。男の子も同じ事を考えていたみたいで、一緒に笑うことが少しだけ楽しくて、懐かしく、嬉しさもあった。
「じゃあ、気をつけて」
本当に気をつけないといけない。多分この人はそういうことじゃないんだろうけど、私としては本当にこの人の優しさが的確すぎて、素直に聞き入れた。
「はい。ありがとうございました」
頭を下げて、男の子が荷物を持って荷物を受け取りに行く背中を見送る。その後姿に一瞬、匠君を感じた。
「あっ……」
でも、その背中はすぐに人の中に消えて、それが夢みたいに消えていく。
「そんなわけないよね……」
だって、あの時、匠君のお家には彼女が来ていたんだもん。よく分からないけど、彼女の子は私の前から走って、神社のところで匠君じゃない男の子と言い争いみたいなことをしていたけど、匠君はここにいない。それだけは変わらない事実。目と鼻の先立った距離が少しずつ遠くなる。今の男の子ももう会うことはないかもしれない。ううん、ない。名前も何も知らない人で、多分大阪に戻ると、私は忘れていくと思う。優しい人がいた。そんな薄れる印象だけを抱いて。

十一抄．流去の道（後書き）

閲覧ありがとうございました。

次回更新作は、「Ｆｕｌｌ　Ｃａｓｔ　Ｅｖｅｎ」です。

長らくのおまたせでしたので、少し多めに更新するつもりです。

更新予定日は２１日を予定しています。今しばしのご辛抱をお願い申し上げます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3605e/

ｉｆ　－The letter for you -

2010年10月21日22時54分発行